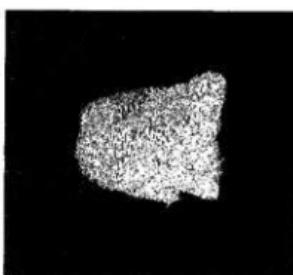
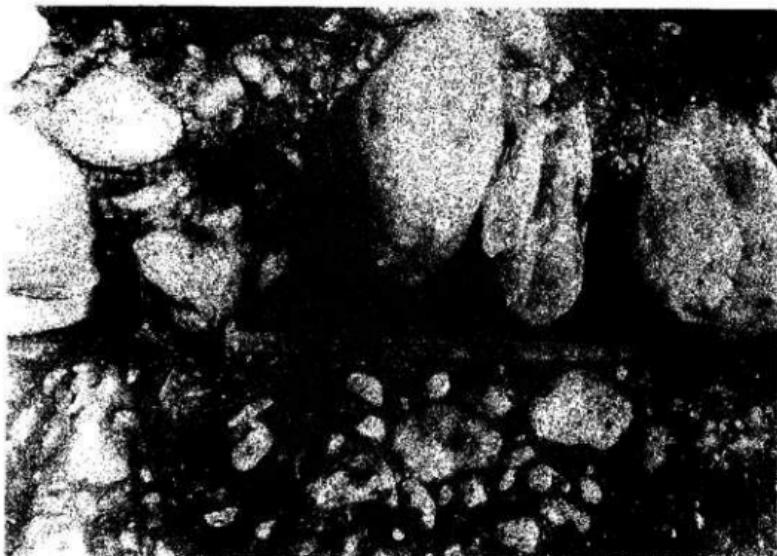


# 研 究 紀 要

第 8 号

1991

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



熊谷市三ヶ尻林4号墳出土象頭装大刀

上 出土状況 下 X線写真 (左 鍔 右上 銅尻金具 右下 柄頭鍊金具)

# 目 次

## 序

### 方形周溝墓観察の一視点(1)

大屋 道則 ..... 1

### 溝中土壙小考

福田 聖 ..... 9

### 関東地方東部における古墳出現期の様相Ⅰ

(古墳出現前夜の様相) 村田 健二 ..... 37

### 関東地方における埴輪祭式の受容

山本 靖 ..... 65

### 埼玉県の格付大刀

瀧瀬 芳之 ..... 101

### 「鬼高式土器」の外部

#### —古墳時代後期福島県域土器群と北部関東土器群の比較検討—

利根川章彦 ..... 127

### 古代武藏の土師器理解のために

#### —北武藏の7・8世紀の様相—

赤熊 浩 ..... 165

# 「鬼高式土器」の外部

—古墳時代後期福島県域土器群と北部関東土器群の比較検討—

利根川 章彦

## 1. はじめに

古墳時代の集落遺跡・集落遺跡群の様相・変遷を考えるにあたって、土師器の編年と地域性を細かく分析し、住居・集落の同時性・地域的偏在性・偶発的あるいは必然的な移動・移住・編成などを推定することによって家族集団の構成・地域史的総括に迫ることができる。これが上器研究から社会構造の復原に至る最もオーソドックスな方法と考えられてきたと思う。

現在では、土師器研究はもとより古墳時代の集落研究も停滞気味であるが、各地域における土器編年細分案の提示が限界に達していること、黒井峯遺跡・中筋遺跡のように火山灰に特定時期をバッキングされた遺跡において通常の発掘調査では検出不能の遺構が検出されたり、同時期の住居群に厳密な方位の規制が認められなかつたりしたことなどによって、従来の研究法の有効性に疑問符が付きだしたことが一因であると思う。遺構の問題はひとまず置くとして、土師器編年細分論から直接的に導かれるのは各地域における上器製作の「流儀」であり、土器生産から流通・消費までの各小集団の経済的な関係性にはかならないが、移動論を含めた大きな人間集団の動態を考えるために土器の「地域性」を正確かつ詳細に知る必要がある。

筆者もかつて埼玉県児玉郡地方の和泉式後半から国分式初期の上器編年細分を試み、それを基礎に5~8世紀の集落遺跡群の地域的動態を考察し、群集墳形成期と国都里制成立期に集落遺跡群の編成の変化の大きな画期があることを指摘したことがある(註1)。上器変遷の枠組みは現状ではもう既に有効でない部分があるため今後大幅な修正を必要とするが、本稿の目的に適合しないので機会を改めて再考してみたい。ただし、社会構造の復原を前提に検討する場合、この方法以外に遺構そのものの型式分類や遺物の出土のしかたにおける特徴、上器編年同時期の住居相互の位置取り・重複から考えられる「住まいの流れ」(註2)など遺跡論・遺構論的検討が必要であることは言うまでもない。しかし、この中で指摘しておいた児玉郡内の土器の「地域性」はまだ有効であり、さらに正確な把握が必要になっていると思う。

本稿の目的は、筆者が主として検討してきた埼玉県北部の5~6世紀の土師器に関して東日本全体の中でどのような位置付けができるかを考え、いわゆる「鬼高式土器」の歴史的世界・律令国家成立以前の邊境の問題を考えるための基礎作りをすることである。当面の対象として福島県域の同時期の上器群との比較検討を進んだ理由は、この地方が「鬼高式土器」の分布域の北側に接觸しており、その土器群が「鬼高式土器」の北限の上器群とどのような交渉を持っているかを明らかにしておく必要性を感じたという取るに足らないものであったが、将来的には氏家和典氏の仙台湾を中心とした上器編年や東北地方各地の土師器研究と関東地方各地の土師器研究の比較検討に進みたい。

次章以下の本論においては、5世紀後半～6世紀代に属する福島県内のいくつかの遺跡の土器の観察結果と派生する二、三の問題を述べ、北関東の土器群との若干の比較検討を試みたい。

## 2. 古墳時代後期土師器の地域性認識の研究動向について

実際の資料の検討を始める前に、「鬼高式土器」周辺の土器の地域性の研究の推移に触れておこう。1970年代までの土師器研究一般には地域性の認識は希薄であった。基準資料の偏在性にもよるが、この時期までは「編年体系確立の時代」と言える。この時期の鬼高式土器編年論の代表的なものは、戦前の山内清男・奥田直栄両氏らの古墳時代土器二大別法を主眼とした研究(註3)、「原史学」の確立をめざしてその時間軸としての弥生土器・土師器の体系的総括を試みた杉原莊介の「鬼高式」認識(註4)、桜井清彦・玉口時雄・小出義治氏らの実体的編年論を通じた鬼高式二細別論(註5)、八王子市中田遺跡の調査成果から析出してきた岡田淳子・服部敬史両氏らの鬼高式二細別案(註6)などがある。

1970年代以降、土地開発の大型化と文化財保護法の整備によって集落遺跡の発掘調査が大規模化し、遺跡の破壊と引き替えに良好な古墳時代の土師器の資料が蓄積されていった。鬼高式土器に限ったとしても、千葉県千葉市上ノ台遺跡・有吉遺跡、東京都八王子市船山遺跡、埼玉県本庄市後張遺跡などに代表される住居跡総数200軒を越える集落遺跡のような少人数の研究者では細かな分析が困難な程の大量の土師器群が出土するに至り、さらに激増する傾向が現在も続いている。

かかる状況の中で、各県の研究者が土師器編年の細分案の作成に乗り出し、100年を四分割する25年程度のオーダーを廿年に編年細分論を提示した。いちいち論及しないが、このような研究は平城宮跡・藤原宮跡出土土師器を細分した吉田恵二氏(註7)・西弘海氏(註8)らの業績や山田昭二氏(註9)・中村浩氏(註10)らの大坂府陶邑古窯址群から導き出された古墳時代須恵器の細分様式(窯式あるいは段階細分)に刺激されて、土師器型式概念による編年から曆年代提示型編年に進むという共通した特徴がある。この結果、各地の土師器の細分案は見かけ上比較しやすくなつたはずであるが、本来年代比定を依拠していたはずの須恵器が地方窯製品のため陶邑編年が通用しなかつたり、近隣地域の編年案と対比する努力を怠っていたりしたため、実際には細分案同士の対比は簡単ではない状況にある。この点に関しては筆者も例外でなく、自戒の念を禁じえない。

しかしながら、隣接地域の土器の搬入や模倣に着目して編年上の対比を志向する研究や、特定器種の広域的分布を確認しながら土器の地域色を析出させようとする研究も見受けられる。古くは、岩崎卓也氏の鬼高式土器総論の中に盛り込まれた地域色発現とその背景への論及(註11)や玉口時雄氏の全国編年案(註12)、杉原莊介氏を中心とした土師器の集成と解説(註13)等があるわけであるが、信州(善光寺平・伊那谷)・北関東・南関東を具体的に対比し、その時間差の介在まで論じた岩崎氏の研究は、弥生時代以来の地域性・古墳築造状況と土器群の領域の比較、さらに地域史的総括など現在の研究においても参照すべき点が少なくない。この他にいわゆる「比企型环」を特定生産集団と結び付け、武藏地域を中心に分布し、「仲買人」のような媒介者を集落の中に想定しようとする服部敬史氏の小論(註14)も無視できない。

近年、共同研究によって古墳時代後期の土器の地域色に迫ろうとするものが目立つが、それには

杉山晋作・上野純司・村山好文・金丸誠・石倉亮治各氏らを中心とした房総地域の研究（註15）、東北北部から信州・北陸・東海までの東日本各地の黒色土器出現期を追求した東国土器研究会の業績（註16）、福島県各地域の5～7世紀の土師器の比較検討を中心に東北各地・北関東部にも論及しようとした鹿島町の「万葉の里シンポジウム」（註17）などを指摘することができる。これらはごく最近の編年再編成志向として考えることができるが、細部にわたった比較は必ずしも十分とはいえない部分が多い。

個人によるものもさほど多いといえず、南関東の环形土器の詳細な比較検討を中心とした長谷川厚氏の研究（註18）、大型巣形土器を開東・東海・信州などの各地域について比較した中村倉司氏の研究（註19）、長胴甕の地域差を開東各地域で比較した村山好文氏の研究（註20）、「善光寺平型环」に関する田口一郎氏（註21）、「比企型环」に関する水口山紀子氏（註22）、北関東西部地域の环形土器の地域性の地域性を明らかにした田中広明氏（註23）などの环形土器研究が目立つ程度である。これらにおいても、土器の観察や他地域の土器との比較は詳細を極めるが、時間軸上の土器の変化と地域色の現われ方についての法則的認識はまだやや難点のある部分があり、まだ研究途上という状況で把握しておいた方がよいのかもしれない。ただし、中村論文における、庵・須恵器・大型甕の出現に関する「毛野王權」と西國・朝鮮との（畿内王權を介在しない）直接的交渉の可能性の示唆、田中論文における埼玉古墳群被葬者層の共同体成员に対する徭役労働差発權と地域的土器群の領域の様相の関係性および在地首長層による生産・再配分の構造化の指摘は今後十分考慮していかねばならない重要課題である。

いずれにしても、かつて岩崎氏が示唆した鬼高式土器を中心とした土師器の編年・地域性を基礎とした地域史的把握を方法レベルで止揚し、新たな土師器論および土器生産・流通・消費に関する地域史論を構築する段階まで行っておらず、本稿で示す試論もやはりその域に到達しないが、本章で触れた研究動向を踏まえ、今後の議論の基礎とすべく、次章以下に具体的な土器群の検討とそこから析出する地域性に関する二・三の問題を論じてみたい。

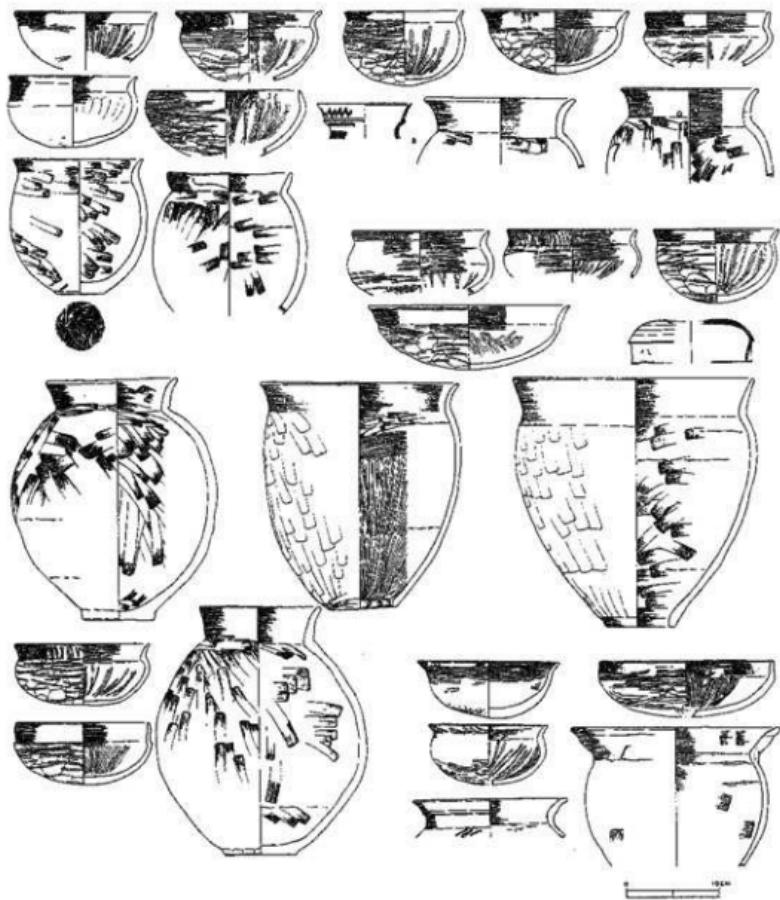
### 3. 福島県域の古墳時代後期土師器の様相

福島県においても近年の大規模発掘調査によって蓄積された古墳時代後期の土師器群はかなり多くなってきており、郡山市のように独自の編年ができるほどに資料的に整ってきた地域もある。本章ではこれらのうち県南地域（母畠地区など・いわき市域）・県央地域（郡山市域）・県北地域（柏双地域）などに分けて、良好な遺跡の資料のいくつかを取り上げておきたい。

#### （1）県南地域

ここでは中通り地方南部の国営総合農地開発事業母畠地区の遺跡群を中心に述べ、いわき市域については節を改めて述べたい。

国営総合農地開発事業母畠地区は阿武隈川上流域右岸沿いの6市町村、4,379haの丘陵地帯を対象としており、このうち県南部に属する西白河郡東村大字上野出島地内の矢武川北岸の丘陵地帯には西原遺跡・板倉前B遺跡・佐平林遺跡・谷地前C遺跡・赤根久保遺跡などの5～9世紀の集落遺跡群、7～8世紀に築造された筑内古墳群などの古墳群が知られ、東西に長い低丘陵上に川を臨む



第1図 福島県南地域の古墳時代後期土師器(1)〔南小泉式(新)段階〕  
 (上:板倉前B遺跡2号住、中:同3号住、下左:同5号住、下右:西原遺跡2号住)

ように分布している。

このうち板倉前B・西原の2遺跡には5世紀後半期、佐平林遺跡には6世紀前半期にあたる土師器の良好な一括資料が含まれている。特に环・塊類を中心にその特徴が考えられている。すなわち丸底で口縁部が小さく外反し、内面に鋸い棱線を持つ壇(内斜口縁壇)(註24)を多く含む「南小泉式」後半・「引田式」併行期の板倉前B・西原、ややバリエーションが多い环類を持つが、その主体が口縁部がやや大きく外反する「有稜環」(須恵器蓋環模倣環)(註25)と「内斜口縁壇」のスタイルが形態化した口縁部が大きく外反し、内外面にほとんど棱線を作うことのない「伝統的

地型壺」を主体とする佐平林という特徴がある。佐平林の資料からは、仙台湾編年の「住社式」併行期として「佐平林式」が提唱されている（註26）。

まず、板倉前B遺跡2号住居跡から見ておこう（第1図上段）（註27）。壺・塊類は内斜口縁の系統のもの（壺A）と口縁部が内湾する半底壺（壺B）の二者がある。前者（壺A）はきっちり「く」の字に折れるもの、小さく外反するもの、大きく外反するものに分かれ、内面の稜線が明瞭なものと不明瞭なものがある。後者（壺B）は口径がやや大きく、体部と口縁部の境目に内側にゆるく折り曲げるよう作られる。ミガキはほとんどの個体に施され、関東の土器に比較するとはるかに人念に仕上げの工程を踏んでいる。壺A・Bともに体部内面に正放射状、口縁部内外面に横位の密なミガキが施されている。口縁部のミガキは強めのヨコナデ痕を消している。体部外面のヘラケズリが細かく、ケズリ後ナデ→ミガキに進んでいる。口縁部外面に最終段階の調整としてタテ方向のミガキを等間隔に施すものがあるが、新しい段階の資料にはこの技法がやや普遍化する傾向がある。

壺は中・小型のものしか共伴していない。口縁部が長くゆるく外反して立つ丸胴の壺（小型壺A、第1・2図）と短い口縁部で「く」の字かそのやや崩れた形態で胴はあまり張り出さないもの（小型壺B、第1図上段のみ）がある。内外面ともよくナデられている。

なお、この住居跡にはTK208型式かそれよりやや新しい段階の須恵器頸の口縁部破片が伴っている。カマドの付設など新しい要素の目立つ住居跡であるが、5世紀後半から終末にあたるものであろう。

2号住居跡より若干新しいと思われる3号住居跡（第1図中段）の壺・塊類は壺Aのみ4点であり、大型壺2点と大型壺1点、須恵器壺蓋1点を共伴する。壺Aは内面の稜がはっきりしないものが増加し、口縁部の屈曲もゆるくなっている。口縁部外面のタテミガキも工具の往復によって施す手法に変わっている。口径の大きな1点は一見須恵器模倣壺の口縁部が外反する形態のものに近いが、口縁部の作りや調整の特徴から2号住居跡の後続形態と考えておきたい。

大型壺は口縁部が長めで、無底形で砲弾形胴部を呈する。内外面ともよくナデられ、ミガキを作りもある。大型壺はやや厚い器壁を持ち、「く」の字状口縁、丸いが長胴化傾向の胸部、平底を呈するものである。内外面ともよくナデられている。須恵器壺蓋は歪みが大きいが、口縁部に沈線を有するものでMT15型式かそれ以前に併行するものであろう。

また、5号住居跡にも3号住居跡とはほぼ同時期と思われる一群がある（第1図下段左）。ここには口縁部が直立する形態の須恵器模倣壺（壺C）がある。壺Cは口唇部を尖り気味に作り、口縁部と体部の境目に沈線を引くようにして稜を作るもので、口縁部に対して体部・底部は深めになっている。壺Aは口縁部の外反度の大きいもので、2号住居跡より器高が低くなり、口縁部外面のタテミガキも往復手法である。大型壺は3号住居跡のものと同様な様相のものである。

次に西原遺跡（註28）を見るが、ここでは1・2・7号住居跡に「南小泉式」後半・「引田式」併行期の土器群がある。1号住居跡（第2図上段左）には壺A・深身の壠・堆・小型壺がある。壺Aは口縁部内面の稜が明瞭なものが多く、板倉前B遺跡2号住居跡の様相に近いが、外反度の大きい口縁部外面タテミガキの一層はない。壠は器壁が薄く、底面に凹部を持つことなど、大型壺の作りかけを壠に作り替えたような丸い器形を呈するものである。堆は胸部に対して口縁部が短いもので、丸底・ややつ



第2図 福島県南地域の古墳時代後期土師器(2)〔南小泉式(新)段階  
(左上:西原遺跡1号住、右および下:同7号住)

ぶれた球形制・外反する口縁部という特徴がある。壺・壇類がミガキ多用なのに対してこの壺は丁寧なナデが施されるのみである。小型壺は胸部上位・口縁部を欠いているが、長胴化傾向の丸胴・平底であり、胸部内面と外面上半部はよくナデられるが、外面下半部はヘラケズリのみの調整である。

2号住居跡(第1図下段右)には壺A・壺C・小型壺・大型壺がある。壺Aは口縁部内面の継が不明瞭なもの2個体である。口唇部の作りがややゆるくなっている。1号住居跡より後出的である。壺Cは綾線が曖昧な大振りの壺で器高が低い。この範疇に含めるのを躊躇するような形態であるが、関東地方の須恵器模倣壺よりも「住社式」の壺の系統の一部と考えた方がよいかもしれない。小井川和夫氏の言う「関東系土器」(註29)の中に含まれるような壺の形態に近いものがあることも注意を要する。小型壺は口縁部外面に段あるもの、口縁部が分厚くボッティリと作られるものがある。前者はヨコナデが強めで、頸部の屈曲がややゆるい。後者はヨコナデが弱めで、口縁部～胸部上位に指痕E痕や粘土帶接合痕が目立つ。双方とも丸い胴を持つようである。大型壺は長胴化傾向の丸い胴を持ち、底部は輪台状の作りになる平底であり、内外面がよくナデされる。内面には粘土帶接合痕があり、ゆるいミガキも認められる。

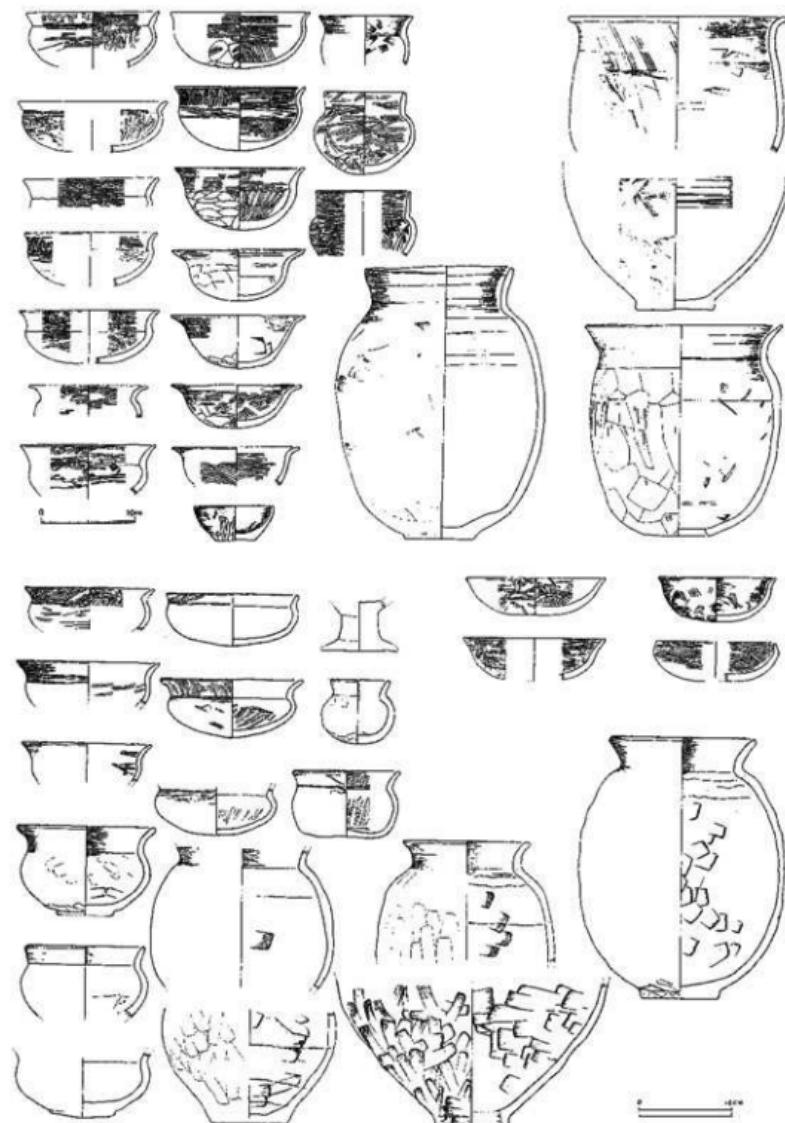
7号住居跡(第2図下段および右側)には壺A・壺B・壺C・壺・小型壺・大型壺・大型壺がある。壺Aは、底面を欠くが丸底と思われるものと平底のものがあり、報告書に図示されていないが、前者に近いものがある。前者は分厚い器壁で、口縁部の屈曲ややや弱く口唇部は尖る。内外面のナデは丁寧であり、ミガキはやや薄に施されるが、平滑で光沢が少しある。後者は報告された実

測図とやや異なり、口唇部は尖り気味である。口縁部・体部上端の外面はミガかれているが、それ以下はナテである。底面はケズリ→ナテで整えられた小さな平底である。環Bは、小さな底部を持ち、外傾する体部がより特徴的であり、口縁部の内湾度の弱い器形である。前者は上げ底状のやや深い凹部を持つ底部で口唇部は尖り気味、ナテ調整が主でミガキはまばらである。後者はわずかに上げ底状で前者より大きめの平底である。やはり口唇部は尖り気味で、外面のミガキは密である。環Cは2号住居跡と同様、本来的な須恵器模倣環ではなく、体部と口縁部の境目を屈曲させ、そこに外面ともやや緩い稜を有する形態である。大振りで、口縁部に対して体部・底部が深い。体部・底部の外面は細かいケズリ→まばらなミガキ、内面は密な正放射状ミガキである。堆は中型になったもので、分厚い器壁、短い頸部・外側に面を作つて尖った口唇部が特徴的である。口縁部・頸部の外面にはタテ方向のミガキ、口唇部と胴部の外面はヨコ方向のミガキ、胴部内面はナテが施され、胴部内面には粘土紐マキアケ板が目立つ。小型要は、小型で器壁の厚い、荒い調整のものと中型で丁寧な作りのものがある。前者は口縁部が直立気味で、頸部の屈曲は小さい。胴部はやや丸く、外面はサックリした面取り状のケズリが施され、内面は強めのナテである。平底の底面は抉り取るようなケズリで作られる。底部は分厚い。後者は長い口縁部が上半で強く外反するもので、頸部の屈曲も強めであり、やや間延びした丸胴でケズリで整えられた平底を有する。ヨコナテは口縁部に限定されず胴部上端に達しており、胴部内外面は丁寧なナテである。胴部上位の内面には粘土帯接合板が2条ある。胴部外周全体がスス付着のため黒い。大型要は胴下半部を欠くがかなり大きく胴の張る器形で器壁も厚い。頸部の屈曲も強い。胴部上端外面にヨコナテ状のナテが施され、この部分にはヘラ痕も顯著である。外面は丁寧にナテされている。大型瓶は長胴甌の底部を筒抜けのようにした無底形の形態で頸部の屈曲がやや強い。頸部には穿孔されているが、一对の可能性もある。胴部内外面はよくナテられているが、胴上半部外面はかなり丁寧で、ヨコナテ風である。

西原遺跡の資料は環A・環Cの様相から1・7号住居跡→2号住居跡という変遷で考えることができそうである。前者は5世紀後半~末葉、後者は6世紀初頭前後であろう。つまり、板倉前B遺跡の2号住居跡→3・5号住居跡には併行させて考えることができる。

続いて佐平林遺跡を見ておこう(註30)。佐平林遺跡は総面積約80,000m<sup>2</sup>に達する大きな遺跡で、全体の1割程度が調査されている。調査報告書の刊行順にI~IV区、V区、VI区、VII区、VIII区に分割されている。I~IV区は14号住居跡が「南小泉式」後半・「引田式」併行期、1・3・4・5・6・8号住居跡の6軒の住居跡と22号土壙が「住社式」併行の「佐平林式」・「舞台式」、7・16号住居跡が「栗園式」に属する。VI区は4号土壙が「佐平林式」、VII区は3・7・11・18・21号住居跡、1号土壙、E-6グリッド一括が「佐平林式」・「舞台式」にあたる。これらの資料のうち、「佐平林式」・「舞台式」に該当するものを取り上げたい。

まずI~IV×4号住居跡(第3回上段)であるが、ここでは環Aはごくわずかしかなく、その変形したものと考えられる、口縁部が強く外反し体部と口縁部の境に明瞭な棱を持たない丸底の环(环Dとする)と、环Cの系統にあるものだとは思うが、口縁部が外消して立ち口輪部が外反するもの(环Eとする)が主体となる。环Dには外形上环Eとの区別が明確でないものもある。口縁部と体部の境の内外面あるいは内面・外面のどちらかに明瞭な棱のあるものを环Eとしておこう。4号住



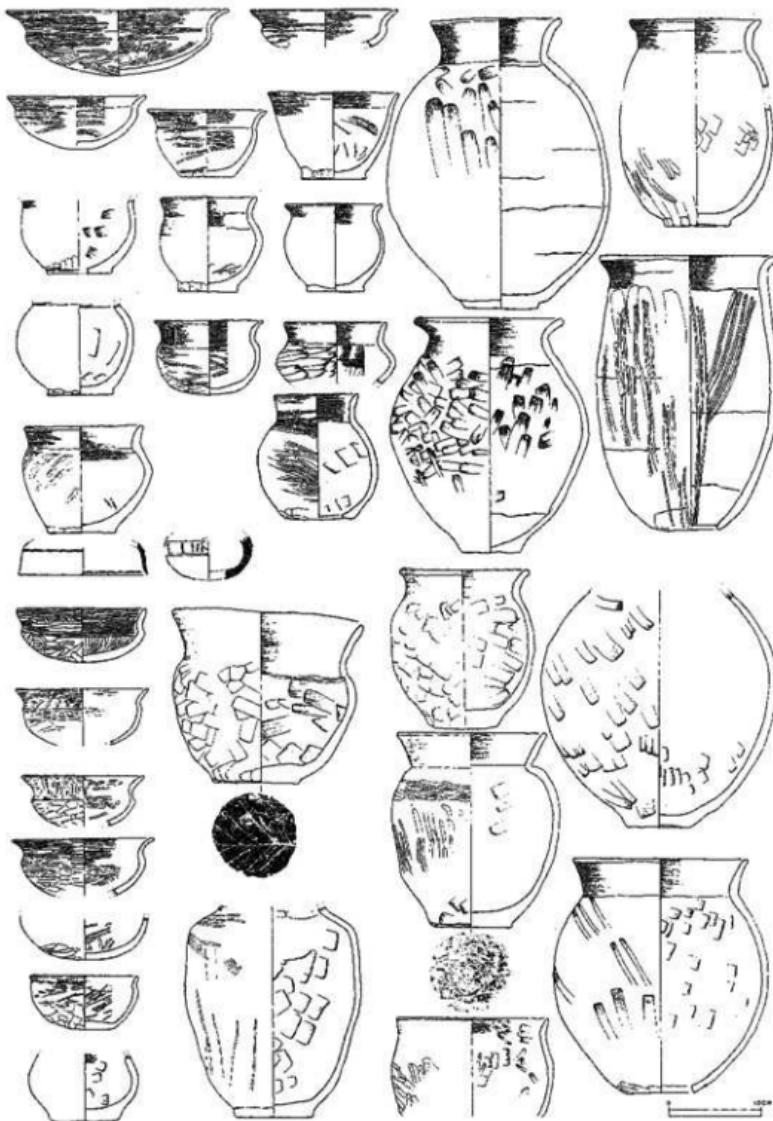
第3図 福島県南地域の古墳時代後期土師器(3)【乾平林式(古)段階】  
 (上：佐平林遺跡 I ~ IV区 4号住、下：同埋区 3号住。ただし中段右寄りの环は、左：I ~ IV区  
 1号住、右：同 3号住)

居跡では供養器の内訳は環A 3点、環D 6点、環E 4点、その他2点となっている。環Aは体部が浅く、口径が若干大きくなっているが、体部内面放射状ミガキ、口縁部内外面・体部外側ヨコミガキは前段階と同様である。環Dは体部から口縁部・口唇部まで緩やかな「S」の字を描いて移行し、やや深めの丸底になっている。ただし、より環Aに近似しており、口縁部と体部の境に稜を持てば環Eと区別のつかなくなるものと口唇部の外反度が強く、体部の径と口径の差が大きいものに分けて考えられる。環Eは後の意識はあまり強くない作りであるが、調整技法上も器形上も口縁部と体部の区別が明確である。なお、外面の調査は環D・環Eとともにミガキが卓越するが、環Dにミガキを省略する傾向がある。口縁部外面にタテミガキを施すものも少数であるが双方ともにある。また環Dのうちの1点には内面が黒色処理されている。大型甌は前段階以来の長胴化したもの（甌Aとする）と胴部の張り出しが弱く口径の大きな変則的形態のもの（甌Bとする）の二形態がある。甌Aは頸部で「く」の字に屈曲し、やや長めの口縁部がゆるく外反して立ち上がる。胴部は前段階より長胴化が著しいが、やや丸い胴部を呈するものもある。底部は平底で、木葉痕を持つものもある。外面とも丁寧なナナで仕上げられ、口縁部のヨコナナが胴部上端に及ぶものもある。甌Bは胴下部を欠くが、類品が34号上塙出土品中にあり、類推可能である。口縁部は上位で強く外反し、口径と胴径はほぼ等しい。頸部もほとんど屈曲せずに胴部に移行し、下半部で脇がつまると「すん胴」に近い形態となる。底部は平底である。器高も甌Aほど高くない。甌Aと同様丁寧なナナで仕上げられる。ヨコナナは外面ないし内面において胴上端部まで施される。堆も若干量出上しているが、口縁部が強く直立気味となり、「南小泉式」段階の器形よりも矮小化している。大型甌は無底形であるが、胴部下端のつままり方が顕著であるため、孔の径はやや小さめである。頸部でゆるく屈曲し、口縁部は外反するので、甌の形態の極である。前段階の大型甌からの系譜がたどれる器形ではない。これよりやや新しい段階もそうであるが、「佐平林式」においては甌形態で副次的に製作される甌が多いようである。

なお、この住居跡と様相の近いものに1・3号住居跡およびⅣ区3号住居跡など（第3図下段）があるが、3号住居跡には口縁部を内屈させる形態の小振りの環Bがあり、1号住居跡の環Dは体部から口縁部の立ち上がりがゆるく外傾する形態のものを含む。また、「南小泉式」後半・「引田式」併行期と考えられる14号住居跡に、報告書に図示されていないが、須恵器模倣度の顕著な環Cが伴出している。これらを状況証拠として把握していくならば、「佐平林式」の（古）段階は6世紀前半代でも5世紀に接する時期までは上がらない時期とすることができよう。

I～IV区4号住居跡に後続する段階はI～IV区6・8号住居跡、Ⅳ区7・11・18・21号住居跡などをあげることができよう。この段階は後述する舞台遺跡の土器群に近似しており、「佐平林式」（新）段階の一例と「舞台式」が年代的に重複する部分をもつことが想定できるかもしれない。Ⅳ区7・21号住居跡（第4図）を中心に述べることにする。

环・塊類は環Eを中心となる。口縁部の外反度が大きくなり、口縁部中位で屈曲するような作りを持つものもある。環Dもあるが、器形・調整手法の特徴は環Eとほとんど変わらない。また、7号住居跡・I～IV区6号住居跡には口径のかなり大きな環Eが出土している。11号住居跡では環Eに形態の類似する環D、21号住居跡には作りの緩い環Aもあるが、環Eの影響で変形している。I



第4図 福島県南地域の古墳時代後期土師器(4)【佐平林式(新)段階】  
 (上: 佐平林追跡區7号住、下: 同21号住)

～IV区8号住居跡には口縁部が外傾する環Cがあるが、これは体部・底部の器壁が厚く、口縁部・体部外面の境目の綫は浅い沈線状に作られる。口縁部のヨコナデは工具を数ヶ所で静止する技法をとっており、体部・底部の内外面は入念にミガかれている。細部の相違点を捨象すれば、関東地方の鬼高式土器のうち6世紀後半段階に盛行するタイプの須恵器模倣环に近い。

甕は大型甕・小型甕があるが、小物入れ的な小型甕が増加している。小型甕はバリエーションが多いが、概して口縁部が短く、直立するもの・外反するもの・外傾するものに分かれる。胴部の張りは弱く、丸い胴か、下半部がつぼまる器形になるものでケズリで整えた平底である。大型甕は器形・調整とも前時期のものとほとんど変わらず、開延びした丸い胴（長胴化傾向）・やや長めで外反する口縁・木葉痕ないしへラケズリ調整の平底・胴部上端に達する口縁部のヨコナデ・胴部内外面の丁寧なナデを特徴とする。I～IV区8号住居跡には小型甕の器形でありながら器面全体を丁寧にミガいているものもある。

大型甕もバリエーションが多く、やはり前時期と同じように大型甕の底部を筒抜けにした無底形であり、口縁部はヨコナデ、胴部は丁寧なナデを施す。ただし、7号住居跡の大型甕は胴部の張らない甕特有の器形であり、胴部内外面にやや密なタテミガキを施すものである。

数少ないが鉢もある。胴下半部は大きく外に開き、胴部上位から頭部にかけて短く直立し、口縁部は小さく外反する。胴部外面は面取り状のケズリの後ナデ、内面は丁寧なヨコミガキ、口縁部はヨコナデである。

須恵器の共伴も数少ない。7号住居跡に立ち上がり部が「ハ」の字状に開く环蓋と胴部の小さな甕の破片が確認されているにすぎない。これらは古くみても6世紀中葉以前に遡ることはなく、おそらく6世紀後葉でも新しい段階になるものと思われる。これはこの段階の年代を指示する根拠にできるかもしれない。

この項の最後に舞台遺跡の「舞台式」について触れておこう。舞台遺跡は別項で取り上げる郡山市域の大根畑遺跡・東丸山遺跡に比較的近い位置にあり、本来県央地域として扱うべきかもしれないが、県域全体では南寄りであり、佐平林遺跡の「佐平林式」と同様に標式的資料でもあるのでこの項で述べておくことにする。

舞台遺跡（註31）は郡山市の南西にある岩瀬郡天栄村に所在し、阿武隈川の一小支流である広戸川の北岸の微高地に占地している。検出された14軒の住居跡のうち、1・2・5・9・11・12・13号住居跡の7軒から古墳時代後期の良好な土師器のセットが得られている。これらはおおよそ6世紀後半に属すると見てよいものである。环・高环・鉢・大型甕・小型甕・大型甕・小型甕・壇など多くの器種を揃えており、器種の欠落の多い母畑地区の「佐平林式」の一群と対照的である（第5・6図）。

环・壇類は环D・环Eを主体とし、环Cのうち口縁部が外傾するもの・内傾するものがやや多くあり、环Aがごくわずかにある。环C・环D・环Eの大半の個体には内面に黒色研磨処理が施されている。环D・环Eの形態は佐平林遺跡の「佐平林式」（新）段階のそれに近似しており、环Cの口縁部の外傾・外反度は仙台湾編年の「栗沢式」のようにかなり寝る感じではない。調整も环Eのうち内面の縁が鋭いものに入念なミガキが施されるのをはじめ、まだミガキを多用する傾向が残っている。高环は「佐平林式」の环Eのような环部をもつもの、同じく环B類似の环部をもつものが



第5図 福島県南地域の古墳時代後期土師器(5)【舞台式段階】  
(舞台遺跡1号室)

あり、双方とも短脚で中実の、ゆるく段をもって裾部の外反する脚部をもつ。

堆は長頭のものと短頭のものに分かれるが、いずれも頭部は直立し、口唇部はゆるく外反する。胸部はややつぶれた球形である。調整は口縁部・頭部外面はタテミガキ、同内面と胴部外面はヨコミガキ、胴部内面はナテまたはミガキで、入念な調整を施す。内面全体あるいは口縁部内面を黒色



第6図 福島県南地域の古墳時代後期土師器(6)【舞台式段階】  
(舞台遺跡2・5・9・12・13号室から抜粋)

処理したものもある。報告書で壺に分類されている大型壺があるが、器形は須恵器大型壺のような大きく胴の張るもので外反する口縁部はかなりしっかり作られている。壺的機能はあると思うが、丸胴壺とすべきものであろう（第6図下端中央）。

鉢は小型壺に分類されたものの中にある広口形態のものである。13号住居跡に2個体あるが、全体から見れば少数である。大きい方は頸部でゆるく屈曲し、口縁部は小さく外反、ややつぶれた球形胴と平底を持ち、胴部外面と内面はミガかれる。小さい方はややボッテとした作りで、器壁は厚い。口縁部直下の胴部上端が最大径で直立する口縁部の径と変わらない。胴部下端に向かってゆるやかにつぼまり、平底の底部に移行する。胴部外面へラケズリ、内面ミガキである。

小型壺は個体数も多く、バリエーションも多い。頸部でゆるく「く」の字に屈曲し、やや丸い胴部・平底を有することが共通するだけで、口縁部に最大径があるもの・口縁部径と胴部最大径が等しいもの・胴部径が口縁部径をわずかに上回るものに分かれ、胴部外面ミガキのものは少なく、外面タテケズリ・内面ヘラナデが主体的である。

大型壺は前段階よりわずかに長胴化が進んでいるようであり、口縁部の長さ・外反度はやや退行気味である。しかし、胴部がやや丸く張り出す器形は引き継がれており、関東地方のような変化を辿らないようである。頸部に一定の直立部分を持ち、その上に外反する口縁部を作出することがこの時期の特徴であろう。調整にミガキを作うものが全体の1/4程あるが、大半は外面タテヘラケズリ・内面ヨコヘラナデである。なお、外面ハケ調整のものがあるが、これは环の黒色処理と共に次段階の「栗園式」併行期の土器の特徴の先取りであろう。

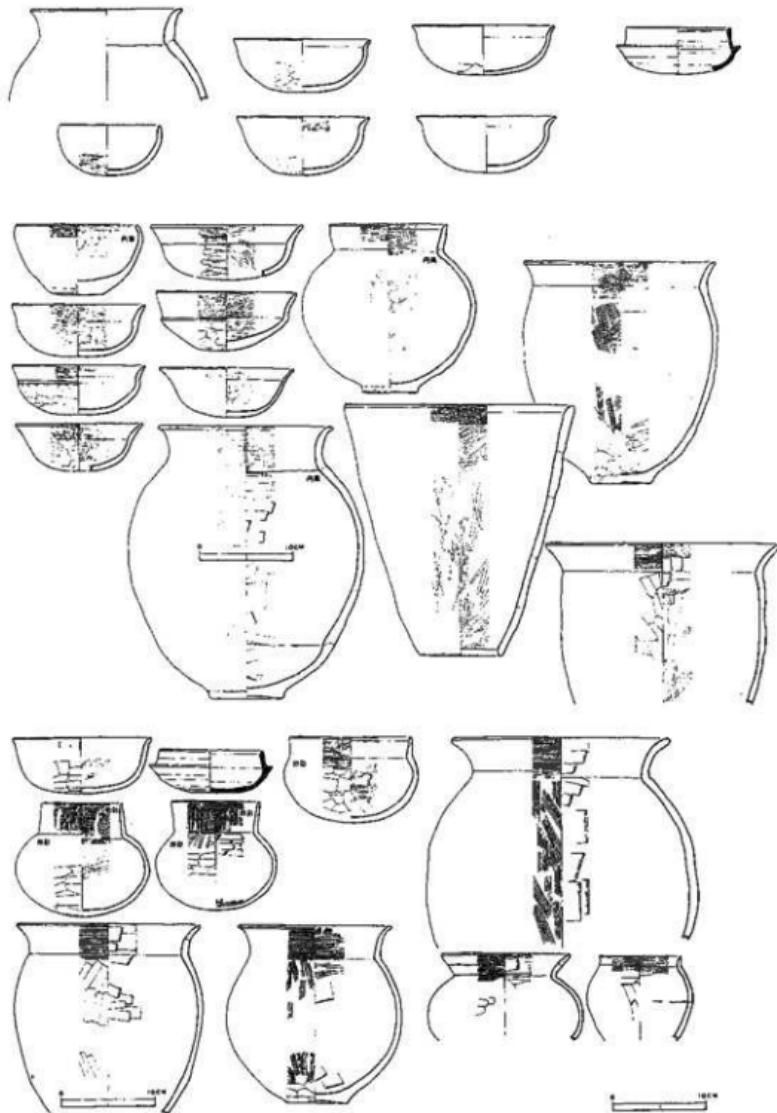
壺は大型と小型に分かれる。大型壺の器形は壺類似の器形から壺専用の器形になっている。わずかに胴が張るが、この段階の壺の長胴化の進行のため、壺の器形をより離れているように見える。内外面ないし内面がよくミガかれる。小型壺は砲弾形を呈するものだが、細かいバリエーションが多く、口縁部が折り返しになるもの・口縁部がゆるく外反するもの・底部が分厚い平底になるものなどがあり、小さな底部を筒抜けにしている。外面タテケズリ・内面ナデないしミガキである。

また、鉢の器形に近い片口土器がある。口縁部は直立し、胴はゆるやかにつぼまり、平底の底部に移行する。内面ナデ・外面ケズリで、片口部の調整はヨコナデ後である。

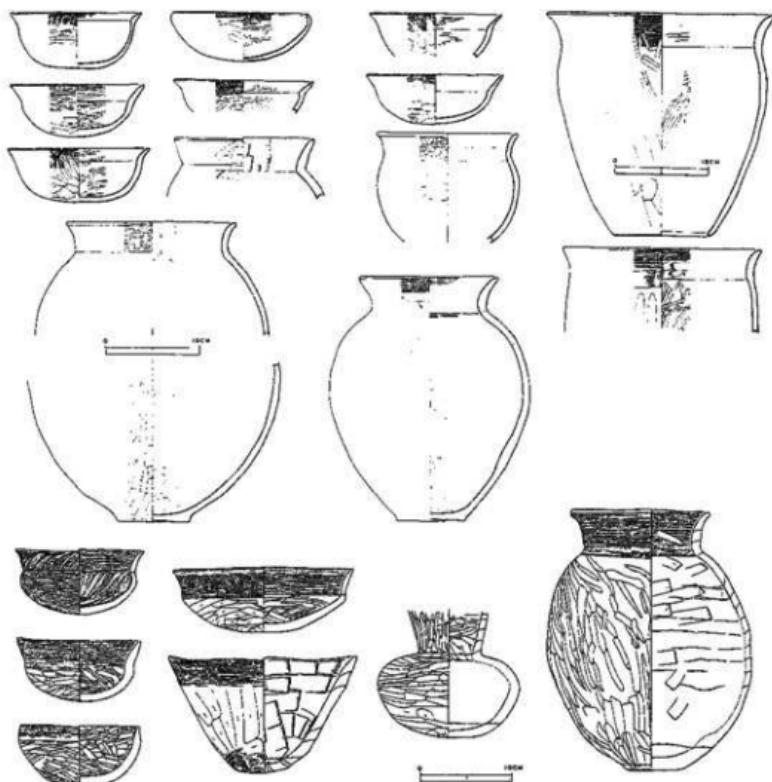
以上、見てきたように舞台遺跡の「舞台式」は「佐平林式」（新）段階と共通する要素が多く、环の内面黒色処理や壺のハケ調整の出現など、「栗園式」に繋がっていく要素も見られる。須恵器の共伴がないので確実ではないが、6世紀後半代の中に位置づけられ、一部は6世紀末葉あたりまで下るであろう。

## （2）いわき市域

福島県南部でも太平洋に面する浜通り地方のいわき市域は中通り地方と異なり、関東地方や仙台湾周辺地域の土器様相の影響を強く受けた土師器群が古墳時代初頭から奈良時代以降まで確認されている。古墳時代後期の土師器を最も多く出土した朝日長者遺跡・夕日長者遺跡（註32）においてもかかる傾向が明瞭に認められる。以下、この2遺跡の資料を中心としていわき市域の土師器群について述べたい。古墳時代後期にかかる土器群を出土した遺跡は他に大畠貝塚・日吉下遺跡・龍門



第7図 いわき市域の古墳時代後期土師器(1)【広岡編年Ⅲ・Ⅳ期】  
 (上：Ⅲ期夕日長者遺跡40号件。中：Ⅳ期朝日長者遺跡35号件、下：Ⅳ期同41号件)



第8図 いわき市域の古墳時代後期土師器(2)【広岡編年Ⅳ期】  
(上:朝日長者遺跡74号住、下:応時遺跡2号住)

寺遺跡・内宿遺跡・久世原館跡・応時遺跡などがあるが、大筋では朝日長者遺跡・夕日長者遺跡の土器様相に合致するので必要なもの以外の資料は割愛する。

朝日長者遺跡・夕日長者遺跡はいわき市南部の小名浜湾を東に臨む丘陵の上に占地し、小名浜臨海工業団地第2期造成工事に伴う発掘調査によって朝日長者遺跡108軒、夕日長者遺跡79軒の住居跡が検出されている。このうち、古墳時代後期前後に属するものは朝日24軒、夕日39軒である。

本稿に該当する部分は調査報告書では「古墳時代中期一後期」・「古墳時代後期1」の区分で記述されているが、「万葉の里シンポジウム」における広岡敏氏の編年では近隣の他の遺跡の資料を含めて「南小泉式」(古)段階から「栗開式」(新)段階併行期まで8期に分類されているうちのⅣ期(「南小泉式」「新」段階)からⅦ期(「住社式」「古」段階)にあたる。ここでは、特定の住居跡については述べず、報告書や広岡氏の編年に沿って器種別に整理するに止めた。

広岡編年III期には環A、丸底で体部と口縁部の区別がほとんどない環（環Fとする）、大型甕などがある（第7図上段）。

環AはII期（「南小泉式」[中]段階）に定着したが、II期のものは大半が平底であり、この段階で丸底化している。内面の棱の明瞭なものとややあまいものがある。口径が比較的大きく、II期のものより浅い感じになる。調整は丁寧であるが、内外面ともよくミガかれるII期と異なり、ナデ市体のものが増加し、ミガキの省略されたものもある。環Fは半球形を呈するもので、東京湾岸の鬼高式（古）段階に出現する丸底の環に類似する。大型甕は大きく張る丸い胴を呈するもので、頭部が「く」の字に屈曲し、口縁部で強く外反する。II期の甕とあまり変化がない。

TK23~47型式の須恵器環が共存しており、5世紀後半~末葉の年代を想定できる。この段階ではII期までにかなり個体数のあった古墳時代前期型の壇・高環がほとんど消滅してしまう。

IV期（「引山式」[新]段階）（第7・8図）では環のバリエーションが目立ち、大型・小型の甕、大型・小型の壇、大型化・変形した壇などがある。器種構成の主体が完全に環と甕になっている。

環Aは少数となり、内面の棱が大きく下って環Eに変化してしまったものが多く、環B・環C・環Fもある。環Bは底部が厚く深身のもの（朝日長者35号住）と、口径が大きく丸底でよくミガかれるもの（朝日長者74号住）がある。環Cは口縁部が直立する形態のものも散見されるが、大半が口縁部が弱く外傾するもので、関東では6世紀段階に入ってからよく見かけられる形態である。環Eは舞台遺跡のように外面に棱を持ち口縁部が強く外済するものではなく、内面のみに棱があるものが主体である。環C・環Eは入念なミガキ調整の個体が多いようであるが、環Cの体部・底部外面はヘラケズリのみである。この他に、朝日長者41号住には環Aの口縁部が弛緩した形態の環Dがあるが、類例の少ない器形である。

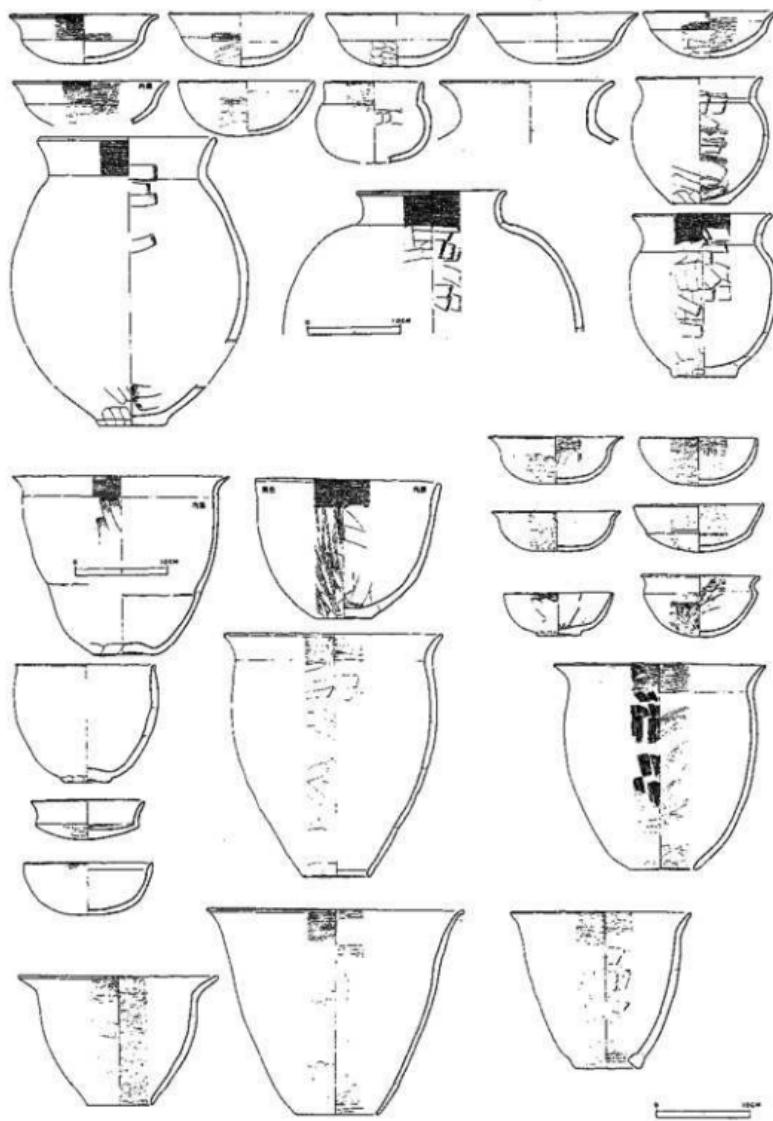
大型甕はまだ丸い胴を持つものが主体であるが、III期段階と比較すると長胴化が顕著となって、口縁部もやや長く作るもののが増加する。胴の張りの弱い口縁部最大径になるものもある。この時期に出現する小型甕も丸胴形態が多いが、口縁部が長くなることや胴部の張りが小さくなることは大型甕の変化に対応している。

大型壇は無底形で砲弾形の胴部を呈するもので、口縁部が外反するもの（74号住）と、胴部と口縁部の区別がなく直線的に外傾する口縁部を持つもの（35号住）がある。小型壇は胴部から口縁部が直線的に外傾するもので多孔式である。VII期（「栗園式」[中]段階併行）には多孔式の小型壇があるようであり、その先駆的形態と考えられよう。

壇は頭部が直立気味で赤彩が施されるものと、頭部が外傾する長頸形態の通有の器形で赤彩されないものがある。VI期段階にはまったく残らず、関東地方における器種構成の変化の方向性と類似する。

なお、この段階に属する朝日長者41号住にはMT15型式前後に相当する須恵器環が併出しており、6世紀初頭から前半あたりの時期を想定することができる。この時期の関連資料として市域南端部にある応時遺跡2号住（第8図下段）をあげておく。

V期には環・鉢・大型甕・小型甕・大型壺などがある。広口の鉢が新たに加わっているが、広岡編年では取り上げられていない（第9図）。



第9図 いわき市域の古墳時代後期上埴器(3)【広岡編年V期】  
 (上：夕日長者遺跡45号住，中左：朝日長者遺跡31号住，中中：同36号住，中右：同103号住，  
 下左：夕日長者遺跡35号住，下中：同24号住，下右：同37号住)

坏は坏Cと坏Eが坏のほとんどの個体を占めるようになる。広岡氏がモデルとした夕日長者45号住では坏Cが圧倒的に多いが、この時期に属すると思われる朝日長者103号住・夕日長者37号住のように坏D・坏E主体の住居跡もあり、坏Cと坏Eの比率はほぼ同じと見るべきであろう。坏Cは口縁部がやや大きく外傾する形態に変化し、やや外反気味の個体が多い。内面黒色処理されるものも散見し、この段階が舞台遺跡の一群に一部併行する可能性もある。坏Eも内外面に稜を持つものと内面のみに稜を持つものの双方があり、口縁部の外反度は大きくなる傾向がある。坏Dも同様である。堆の変形形態あるいは坏Aの変形したもののような異色な坏があるが、深身のものであり、次段階に後続するものではない。坏Fも少數あるが、体部から口縁部は外傾気味の形態に変化している。次のVI期段階では、平底化して口縁部が大きく外傾する坏Cないし坏Eで内面黒色処理されたものに坏が統一されてしまうので、坏のバリエーションの多い最後の段階と考えられる。

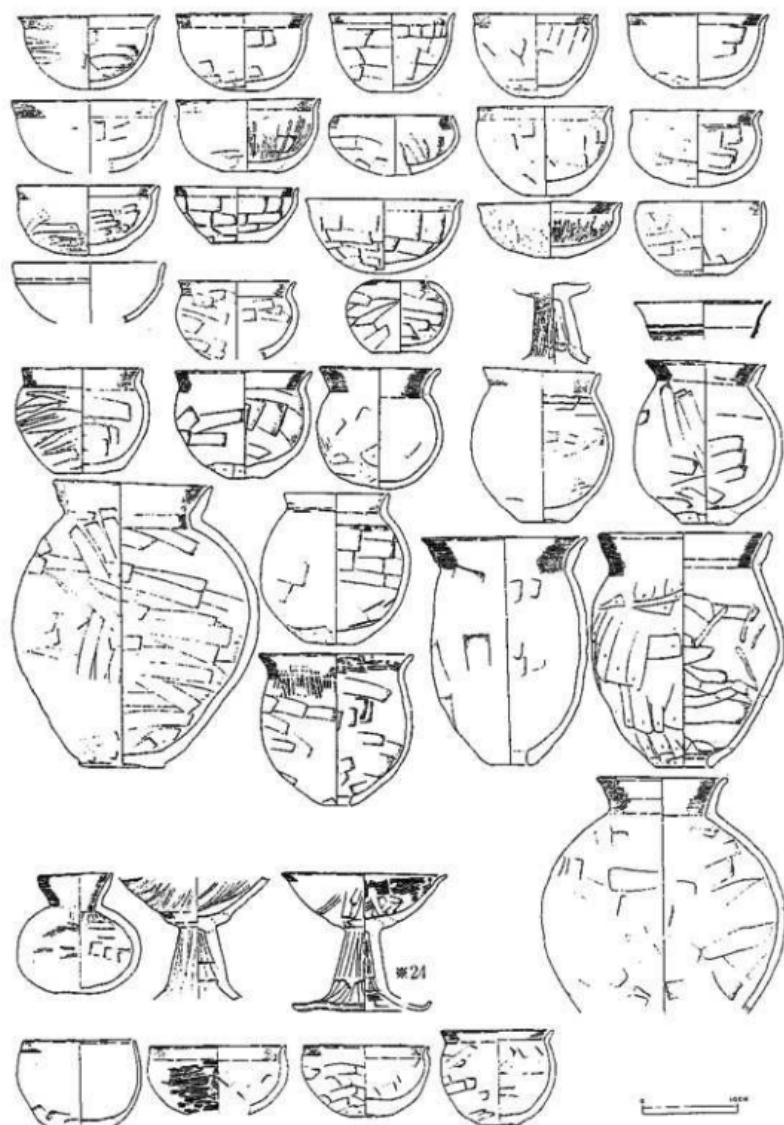
大型甌はさらに長胴化が進むが、まだ前段階からの変形態を引きずっており、長胴甌の形態に変わっていないか。ただし、頸部はきっちり「く」の字に屈曲しており、胴部と口縁部の調整上の区別も確立している。小型甌はこの時期でも大型甌形態を意識したもので、胴部の張り出し弱く、頸部の屈曲の明瞭なものである。鉢は数少ないが、朝日長者31号住・36号住などで確認できる。口縁部が最大径になり、平底ないし上げ底風平底になる。内面黒色処理される。口縁部は直立するものと外反するものがある。定型化していないが、系統的につながる鉢はVI期にも確認することができる。大型甌は朝日長者103号住・夕日長者24号住・35号住・37号住などで確認することができる。無底形・抱弾形胴部は変わらないが、頸部の屈曲が弱まり口縁部と胴部の区別が曖昧になる個体が多くなる。この傾向はVI期以降に著しい。

V期は坏Cの形態から6世紀中葉から後半あたりに位置付けうるが、「舞台式」の様相と比較すると、一部重複するものやや古い様相と考えられるので、下限をとると6世紀終末期段階までは下らないかもしれない。続く「栗圓式」(古)段階併行期の土器群の年代の上限が6世紀代に繰り入れられる可能性もあるものと見ておきたい。

朝日長者遺跡・夕日長者遺跡の報告書では「和泉式」・「鬼高式」という関東の土師器型式名が当然のごとく使用されている。確かに遺跡から出土した土器の個体数の中に「和泉式」的な「内斜口縁」坏あるいはまさに「鬼高式」的な坏Cが一定の比率を占めているように見える。しかしながら、福島県域特有の坏D・坏Eとの関係を見ると坏Cは主体的とは言えないようである。また、高坏・堆などの古墳時代前期型の供器具についても「塙釜式」・「南小泉式」的色彩が強く、仙台湾系土器群が全体的に優勢である。坏A・坏C・大型甌の一部に関東的色彩が見受けられるのみで、「栗圓式」の影響が強まるごとに、まったく関東的地域色を失ってしまうと考えてよいだろう。この点では違う意味で関東的な土器を包含する郡山市域とは対照的である。

### (3) 県央地域(郡山市域)

郡山市域は、古墳時代後期前後のまとまった土器群を持つ遺跡が福島県内で最も数多く調査されている地域である。それゆえ、必然的にこの時期を中心とした土器編年が整備されており、細分案も最も細かく分期されている。



第10図 都山市域の古墳時代後期土師器(1)【兩小泉式(新)段階】  
(上:水作遺跡19号住、下:同4号住。ただし「\*24」だけは24号住)

ここでは、柳沼賢治氏の試論（註33）に従って逐次見ておきたい。

まず、「南小泉式」（新）段階とされた資料から取り上げておこう。この段階は市域東部の永作遺跡に豊富な資料があり、4・19・24・57号住などが該当する（第10図）。环・高环・大型甕・小型甕・大型瓶・小型瓶などがある。

环・壺類は环A・环Bが主体であるが、永作19号住には环Cかとも思われる破片も存在するが、正確な意味で共作しているかどうかわからない。环Aは小さな上口底風平底を持つものと丸底のものの比率が拮抗するような状態で、前段階に比較して丸底化の進行が著しい。内面調整はミガキないし丁寧なナデ、外面はケズリ後ナデで、後続段階の土器よりミガキの比率が低い。环Eが定型化する段階に比較して口径・器高ともやや大きめである。口縁部内面の稜は全体的に明瞭である。环Bは深身の椀形態のもの、外面にゆるい稜を持って体部と口縁部の区別があるもの、丸底化したものなどがあり、次段階に統いていかない。环Cの破片は口縁部がわずかに外傾するもので、稜もあまり深い。深身の器形であり一般的な形態でない。高环は長脚形態で古墳時代前期型の器形である。环部下端の稜はゆるくなっているか、消失してしまっている。19号住の高环は短脚化している。脚標準部がめくれ上がる原因是前段階の继承である。壺はやや大型化し、口縁部が内湾するもので、胴部に対して頭部・口縁部は矮小化している。

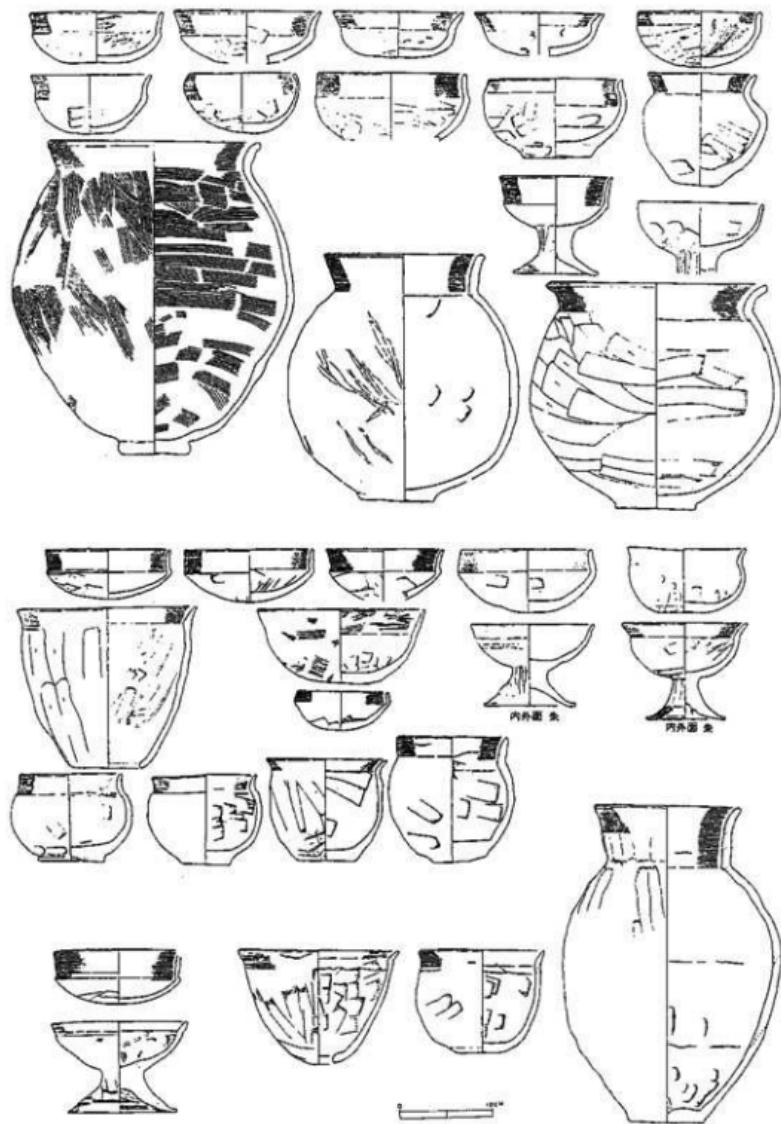
大型甕はやや張り出しの大きいやや丸い胴部を持つが、最大径が胴部上半にあり、撫で肩状になるものが多く、丸胴形態は客体的である。頭部もきっちり「く」の字に屈曲し、長脚化も顕著である。他の地域に先行して「南小泉式」（中）段階でカマドが出現するため、この段階で甕の形態変化も顕著になっていると考えられる。胴部内面へラナデ、外面へラケズリの調整だが、一部に外面粗いハケ目という個体もある。小型甕は丸胴形態が主流で頭部の屈曲は明瞭で、上口底風平底・曖昧な平底・丸底のものがある。

大型甕・小型甕は甕形態に近いものと胴下半部の縮小する甕専用形態のものに分かれるが、胴部がきれいな砲弾形になるものはない。すべて無底形である。ハケ目調整が残るもののが少數ある。

須恵器はTK 208～234型式に属する無蓋高环の破片が19号住から出土しており、5世紀後半段階と考えられている。

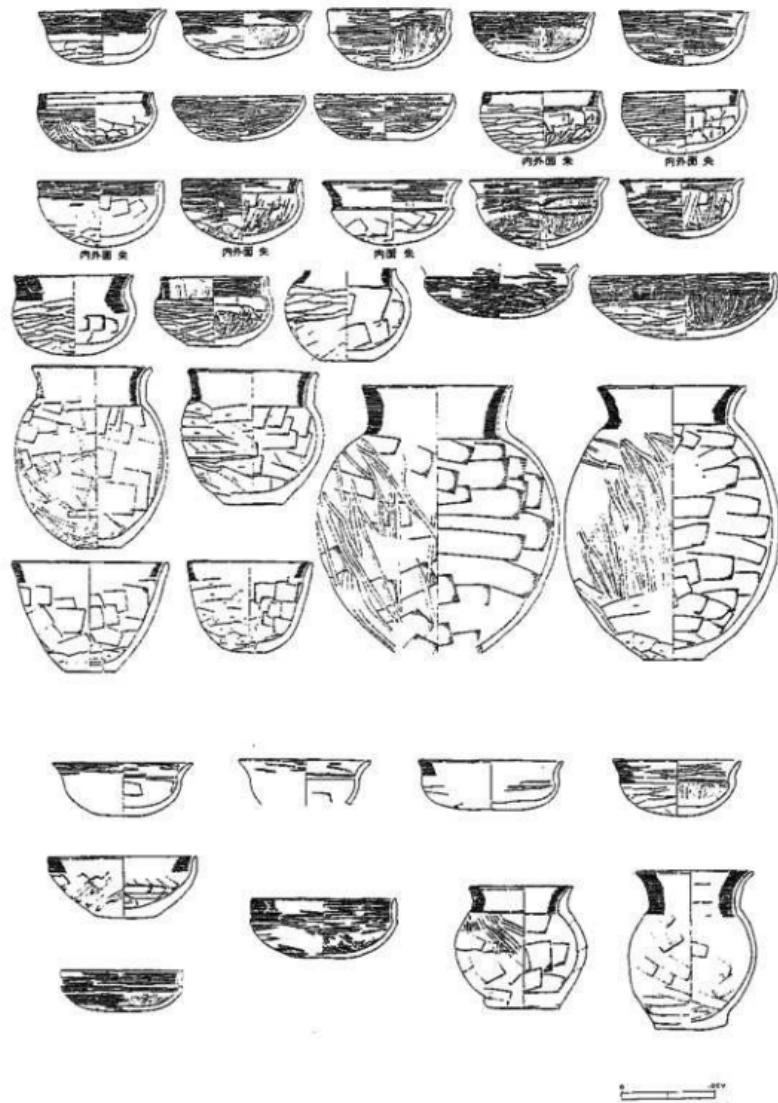
次に、「引田式」（古）段階とされる段階であるが、永作3・5・14号住が該当する（第11図）。ここには定型的な环Cが一定量存在し、甕も砲弾形を呈するものに変わる。环・高环・大型甕・小型甕・大型瓶・小型瓶などがある。

环・壺類は环A・环B・环C・环D・环Eがある。环Cは須恵器环蓋を比較的忠実に模倣したものであるが、関東の鬼高式（古）段階に一般的な口唇部沈線または口端面は見受けられず、体部・底部の深さはそれほどない。稜のあまいものも少數あるが、これらはやや口径の大きな深身のものになる。つまり、环Cは大型と中型があることになる。环Bは前段階と同じバリエーションを維持しているが、ヨコナデで体部と口縁部の区別されるものが多い。环Aは稜の曖昧になったものであるが、内面稜のある环Eとは区別できるものである。环Eは「住社式」段階に定型的なものが多くなるが、この段階のものはやや扁平な丸底をもつ浅身のもので口縁部も短めで大きく外傾する。环Dもわずかで、环Cの口縁部外反形態のものの稜があまくなつたものという印象でみることができ



第11図 郡山市域の古墳時代後期上歸器(2)【引出式(古)段階】

(上:永作遺跡3号住、中:同5号住、下:同14号住)



第12図 都山市域の古墳時代後期土師器(3) [引田式(新)段階]

(上：山中日照田造跡C-11号住、下：同C-24号住)

よう。

高环もバリエーションが多いので、环部形態の違いによって分類しておこう。环A類似の环部を持つものを高环A、环C形態の环部を持つものを高环B、环部の口縁部付近にゆるい稜を持つが、口縁部が外反しないし外傾するものを高环C、环F類似の环部を持つものを高环Dとする。脚部はいずれの高环も短脚・中実・幅広がりで須恵器有蓋高环の影響を思わせる。高环Aは外反する口縁部がやや長めに作られ、内外面朱彩される。高环Bは环部外面の稜が明瞭で、口縁部は直立し、ごく小さく外反する。高环Cは口縁部直下に凹凸を伴うゆるい稜を持つものと、高环Aの口縁部内面の屈曲がゆるくなつたような形態の口縁部を持つものがある。前者は内外面朱彩される。高环Dは半球形の环部で、口縁部のヨコナデが弱く、环部外面の調整はやや強めのヘラナデである。

大型甕は長胴形態と丸胴形態にはっきり分かれ、双方とも口縁部が長めになり、頭部の屈曲が弱まり、口縁部の外反もややゆるくなり、安定した形態を志向するようになる。形態的な完成は次段階であろう。小型甕は胴部の張りが小さくなり、口縁部の外反も弱くなる。鉢形態に近いものまである。甕は前述のように大型・小型とともに泡弾形胴部を有するものになる。口縁部は短いが、頭部で屈曲して外反する。

この段階は环Cの形態から5世紀末葉～6世紀初頭あたりに位置付けるべきであろう。（柳沼氏の試論では5世紀末葉。以下年代観の相違は明記する。）

後続する段階は「引出式」（新）段階とされるものであるが、おおむね「佐平林式」併行で前段階との時間差はあまり大きくないよう見受けられる。市城東部で水作遺跡に近い山中日照田遺跡のC区11号住・24号住が該当する（第12図）。环・大型甕・小型甕・小型甕などの日常用具のみの器種構成となるが、高环も存在していたであろう。また大型甕も欠落しているが、前段階とはほぼ同様な器形のものであろう。

环はバリエーションが多く、环A・环B・环C・环D・环E・环Fがすべてあり、佐平林遺跡の様相に類似する。环Aは口縁部がボッテリ作られていたり、稜がゆるかたりするものであるが、内外面はよくミガかれる。环Fは环Aの口縁部の屈曲が弱まり、内面の稜がわずかに残るものであり、内外面朱彩が施される。环Bは扁平な丸底のものと口縁部にヨコナデが施されるものがある。环Cは直立する口縁部がやや短くなつたものが主体で、口縁部がわずかに外傾するもの、内湾するものもある。やはり大型・中型があるようである。环Eは内面に稜があるものがほとんどで、「舞台式」に通ずる环C変形型はわずかである。环Dは环Aの稜がゆるくなつたものと、环Eの稜がゆるくなつたものがある。ほとんどの個体が入念にミガかれているが、この調整は山中日照田遺跡の特性かもしれない。

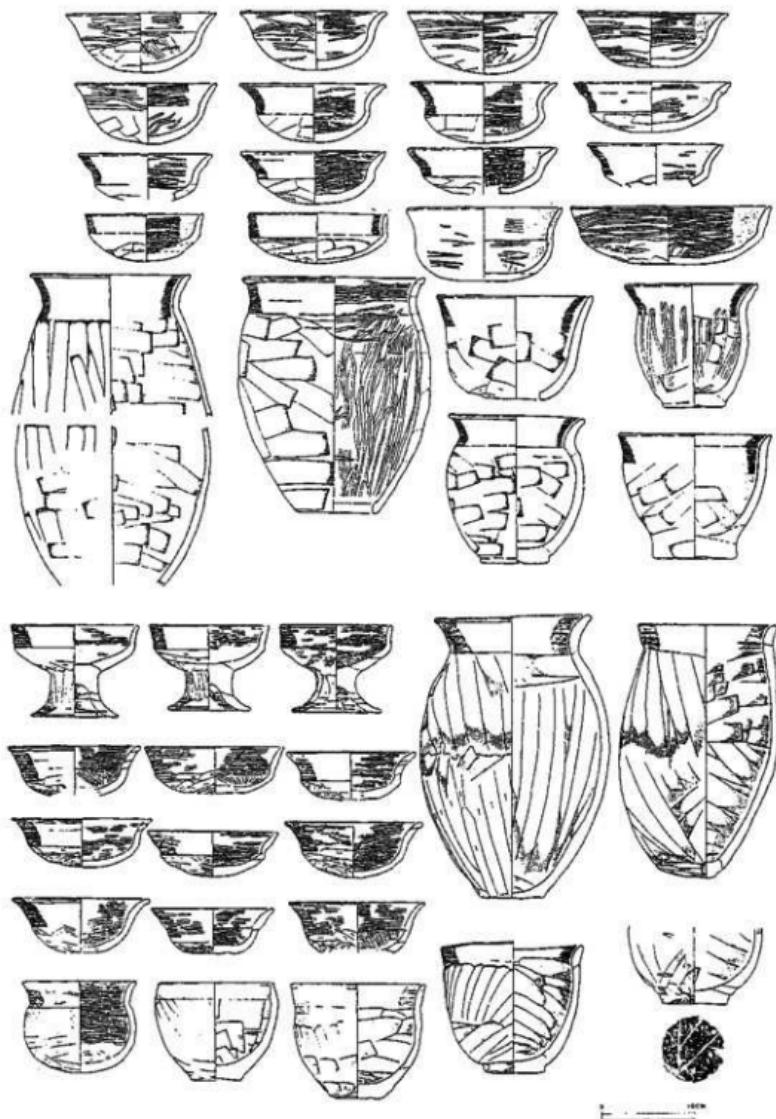
大型甕の特徴は前段階とほぼ同じであり、長胴甕・丸胴甕とともに整った形態になっている。小型甕は大型甕の形態をそのまま小さくしたような整った形態のものになっている。

小形甕は口縁部と胴部の区別が曖昧となつたもので、口縁部ヨコナデで胴部との区別をする。底部は簡抜けにならず、平底の中央に小さな穿孔をする植木鉢の器形になる。

年代比定の材料は多くないが、「佐平林式」の典型的な土器群との様相の類似性から6世紀前半あたりに考えておきたい。（柳沼氏の試論では6世紀初頭。）



第13図 郡山市域の古墳時代後期上層器(4)【住社式(古)段階】  
 (上: 丸山遺跡8号住、下: 同4号住、ただし「※9」は9号住、「※21」は21号住)



第14図 都山市域の古墳時代後期土師器(5)【住社式(新)段階】  
(上:大根柳遺跡2号件、下:丸山遺跡12号件)

続く「住社式」(古)段階は内面黒色処理の环・高环の出現期である。市域西部の太田遺跡・丸山遺跡に該当する資料が多い。丸山8・21号住・太田4・6・9・11号住が取り上げられる。器種は环・高环・大型甕・小型甕・鉢・大型瓶・小型瓶などで、前段階とあまり変わらない(第13図)。

环・壺類はほとんど环Eで占められている。环C・环B・环Dも少數ながら認められる。环Eは内面赤彩のものを含みながら、内面黒色処理されるものを主体としている。内面のみに稜を持つタイプがほとんどで、口縁部の外反度もやや強めになっている。内外面の調整は入念なミガキになる個体が多い。环Cは口縁部が直立するものと内傾するものがあるが、口唇部の作りは弛緩している。稜が不明瞭になって环Bや环Dの範囲に入るのも見受けられ、須恵器模倣环依存型の供膳形態を脱却しつつあるようである。高环も环部内面が黒色処理されるもので、高环Dあるいは口縁部の稜がゆるくなった高环Cに限られる。やや口径が大きく扁平化した环部である。

甕は大型・小型とも変化に乏しく、長胴甕・丸胴甕とも安定した形態を保っている。ただし、内面あるいは内外面の調整にハケ目を多用するものがあり、「衆開式」への型的傾斜を思わせる。また、鉢形態の登場も注目しておきたい。口縁部に最大径を持ち、口縁部と胴部との区別が曖昧であるが、口縁部のヨコナデとゆるい外反で区別される。小さな平底を持ち、内面は黒色処理される。

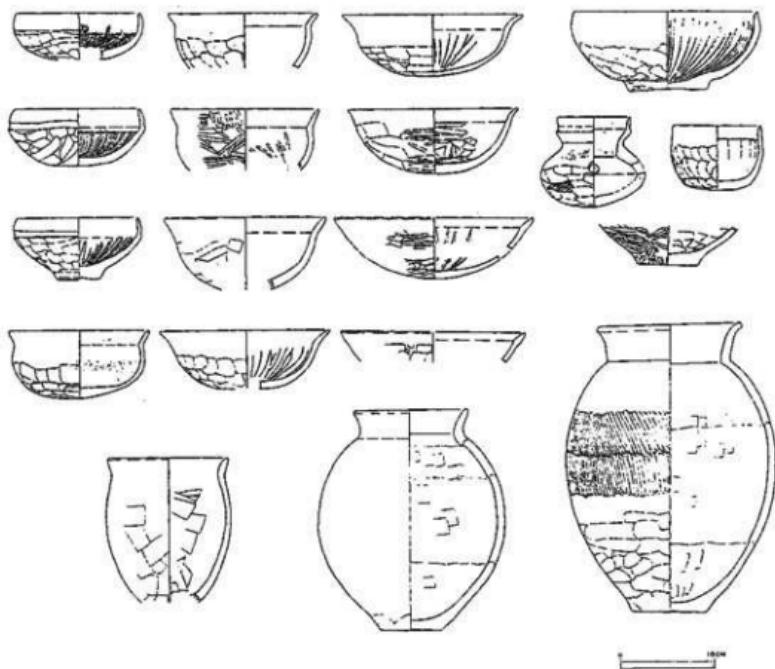
瓶は砲弾形胴部のものと菱形態胴部のものがある。双方とも口縁部は外反するが、頸部の屈曲が弱まり、口縁部と胴部の区別が曖昧になる。おおむね無底形であるが、小型瓶に多孔式で底部に木葉痕のあるものがある。

この段階も年代推定の根拠になる特徴に乏しいが、黒色処理の出現や环Eの一般化、环Cに須恵器环身模倣形態が出てくることなどから、6世紀中葉以降の年代に当たるのが妥当であると思われる。(柳沼氏の試論では6世紀前半。)

最後に「住社式」(新)段階とされる段階について述べる。环・高环・大型甕・小型甕・鉢・大型瓶・小型瓶などがある。市域西部の大根畠遺跡2・4・19号住、丸山遺跡12号住などが該当する資料とされている(第14図)。

环・壺類は环Eが主体であるのは変わらないが、环C・环Dもやや多くある。环Eは内面の稜がややゆるくなるものが多いが、「舞台式」にあるような口縁部外湾型の器形になるものもある。环Cは口縁部が直立するものと外傾するものがあり、後者の量が前者を上回るようになる。口縁部直立型の环Cは稜がゆるくなり、体部との境が曖昧になる。口縁部外傾型は口径がやや大きくて扁平な器形になるものと口径が小さく环Eに類似するものに分かれる。前段階までの大小の环Cのあり方から外傾形態へ変化しても残っていると考えるべきであろう。环Dは口縁部上半が強く外反する形態のものが多く、「舞台式」やいわき市域の資料と同様な器形変化が認められる。内面黒色処理の一般化とヘラミガキ調整の盛行は前段階より進んでいるようである。高环は高环Bのみ存在する。环部外面の稜がゆるくなり、脚部の広がりが小さくなる。

大型甕は安定した長胴甕が長胴化のピークに達しており、頸部の作りの弛緩した個体もある。また口縁部が極端に短く外反も弱いものも加わっている。小型甕はバリエーションが多くなり、口縁部・頸部の屈曲・外反がほとんど変わらないもの、口縁部と胴部の境の曖昧なもの、胴部径が口縁部より小さくなったりなどがあり、大型甕の形態を模倣する傾向はもはやない。鉢はやや小振り



第13図 相双地域の古墳時代後期土師器(1)【引田式(古)段階】

(浪江町本屋敷3号墳周溝)

で口縁部が弱く外反する形態になり、底部も大きくなつて安定した感じになる。

瓶は数少ないので傾向がつかみにくいか、大型は胴部が砲弾形と菱形の中間形態であり、やはり口縁部と胴部の区別が曖昧なものである。無底形の底部である。小型は鉢形態に近く、口縁部と胴部の区別ができるないが、ヨコナデ範囲の拡張やわずかな外反から考えると、口縁部の長さが胴部の半分程にまでなっているようである。胴部下半はやや急激にちぢまり、無底形の底部である。

この時期は土器群のかなりの部分が「舞台式」と同様な様相に変化するため、「舞台式」併行とみておきたい。前節で見たように6世紀後半の時期を与えることになる。(柳沼氏の試論では6世紀中葉から第3四半期。)先行するいくつかの段階を含めてのことではあるが、結果的には柳沼氏の試論よりもやや新しい年代観を与えることになった。

郡山市域は須恵器模倣がややストレートな形で導入されるが、これはカマド出現が福島県の他地域に先行していることやいわゆる初期須恵器を含む古式須恵器の出土も他地域よりや多く認められる傾向とともに、関東以西の地域に対して交通路としてオープンな状況にあることを証明している。しかしながら、南に対する志向性も「住社式」段階またはその直前あたりから仙台湾周辺地域に対する志向性に徐々に変化してしまい、南への「入り口」を閉ざしていく傾向があるように見

える。また、市域西部の方が「佐平林式」や「舞台式」に近い様相を持つ可能性があり、東部地域と上器の地域色の上では異なることも考慮すべきではないかと思う。

#### (4) 相双地域・会津地域その他

前節までに資料の比較的豊富な県南地域・いわき市域・郡山市域を見てきたが、その他少量ながら古墳時代後期の土師器群の出土が知られる地域に相双地域・会津地域がある。様相の不明な点が多いが、比較のために触れておこう（註34）。

まず、相双地域である。この地域は太平洋に面する浜通り地方の北半分にあたり、古墳時代に属する遺跡も少なくないが、現在まで発掘調査によって確認されている古墳時代後期の土師器の資料はまだ断片的である。「引田式」併行期のやや古い段階は南寄りの浪江町元屋敷3号墳、やや新しい段階は北寄りの鹿島町大六天塚跡2・5・6・13・16・20号上坑、「住社式」（新）段階併行期とされるものに、北端部の相馬市大森A塚跡1・2号住および大六天塚跡17号上坑がある程度である。逐次見ておこう。

まず、「引田式」（古）段階（第15図）である。古墳の周溝の出土品であるため、若干偏りがあるかもしれないが、环・大型甕・甌などがある。

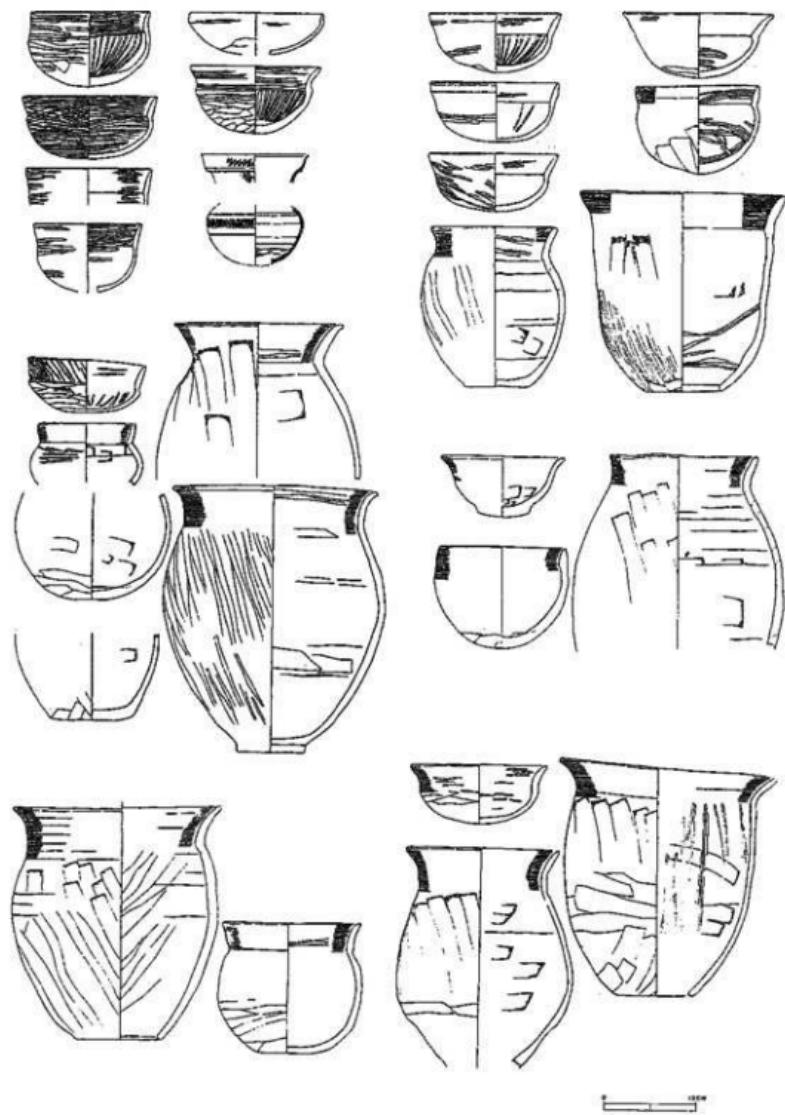
环・壇類は环Aが主体で、少数の环B・环Cがある。环Aは口縁部がやや長く、稜がややゆるくなつたものが多く、口径の大きなものはやや扁平化する。調整はミカキが多用されている。环Bは突出した平底を持ち、内面に放射状暗文が施される。环Cも放射状暗文が施され、内湾する口縁部の外側に沈線で稜を引くものである。甌は壇の胴部に穿孔するもので、須恵器の忠実な模倣のため頸部は段を持って屈曲し、口縁部は直立する。

大型甕は長胴甕と丸胴甕があり、口縁部は長めで、頸部の屈曲もしっかりしている。他地域と異なり、長胴化の傾向は関東地方と同様に早い。小型甕も長胴甕形態であるが、口縁部は短く、頸部の屈曲もゆるい。

环Cが内湾形態であるのは須恵器模倣环としては古く、これを根拠にしてよければ、5世紀後半ぐらいの時期を考えることができる。

次に「引田式」（新）段階であるが、「万葉の里シンポジウム」では元屋敷3号墳と共に「引田式」（古）段階とされていたが、上器様相から見て1段階新しく見た方がよい資料であるため、本稿では（新）段階としておく。この段階の資料には环・大型甕・小型甕などがある（第16図）。

环・壇類は环Eが主体となり、环A・环B・环C・环Dなども若干ある。赤彩されるものが多い。大型の环Fか鉢になるような特異な上器もあるが、鉢として扱う。环Eは内面に稜を持つものが大半であるが、内外面に稜を持つものも少量ある。なかには壇の変形したような深身のものもある。口縁部の外反度はそれほど大きくなく、内外面とも入念なミカキ調整を施す個体が多い。环Aはやや深身で口縁部の屈曲も弱い。环Bは丸底化しており、口縁部も直立気味である。环Cは口縁部がわざわざ外傾するが、稜がしっかりと作られ、やや古手に属する須恵器模倣环の類型に入るものである。环Dは口縁部が外反する环Cの稜があまくなつたような形態である。丸味のある平底を持つ変形タイプもある。



第16図 相双地域の古墳時代後期土師器(2) [引田式(新)段階]

(上左：鹿島町大六天造跡20号土坑、上右：同16号土坑、中左：同6号土坑、中右：同13号土坑、下左：同2号土坑、下右：同5号土坑)

大型甕はほとんど長胴形態であり、丸胴は少ない。長胴甕は定型的な胴部形態に進んでおり、口縁部が長くきれいな「く」の字になるものと、頸部の屈曲のゆるいや短めの口縁部になるものがある。丸胴甕は頸部の屈曲がゆるく、口縁部の上半で外反するものである。胴部の張り出しあまり大きくなない。小型甕はおおよそ人型甕の形態を模倣するものであるが、底部が丸底や丸めの平底になる。鉢は口縁部が直立し、やや幅広のヨコナデを施すものであり、胴下半は丸く、そのまま丸底になる。

瓶は大型しかないが、砲弾形胴部のものと、鎌形態の胴部を呈するものの双方がある。頸部の屈曲はやや強めで、長めの口縁部が外反する。

須恵器はT K23~47型式に属すると思われる甕の破片が2点出土しており、5世紀末葉~6世紀初頭あたりの時期にあたると考えてよさそうである。

飛んで「住社式」(新)段階併行期であるが、この段階では壺・甕を中心とした器種構成が確立している。他に高壺・支脚状土製品などがある(第17図)。

壺はほとんど壺Eと壺Dであり、内面黒色処理される個体が多い。他に壺C・壺Fなどがある。壺Eは口縁部の外反度が強めになる。棱は弱めで壺Dとの区別がむずかしいものもある。壺Dは体部・底部が浅く口縁部が長いものが多く、壺Eの形態に近い。壺Cは口縁部がゆるく外反しない外傾するもので、棱が沈線化したもの、棱があまくなつたもの、体部・底部が扁平化したものなどがある。棱がほとんどなくなつて壺Dの一類型になったものもある。壺Fはわずかに後の痕跡が残っているものと、口径が小さく深身になるものがある。高壺は高壺Dであるが、口径が小さく壺部は深い。脚部が中実に作られる点は他地域とはほぼ同じ特徴である。

甕は人型というよりは中型のもので、頸部の屈曲がゆるく、口縁部の外反も小さい。胴部の張りの小さい長胴形態で、やや丸めの平底である。支脚状土製品が出土しているが、筒状の体部・裾広がりの底部・平らな天井部を呈し、天井部中央には穿孔される。

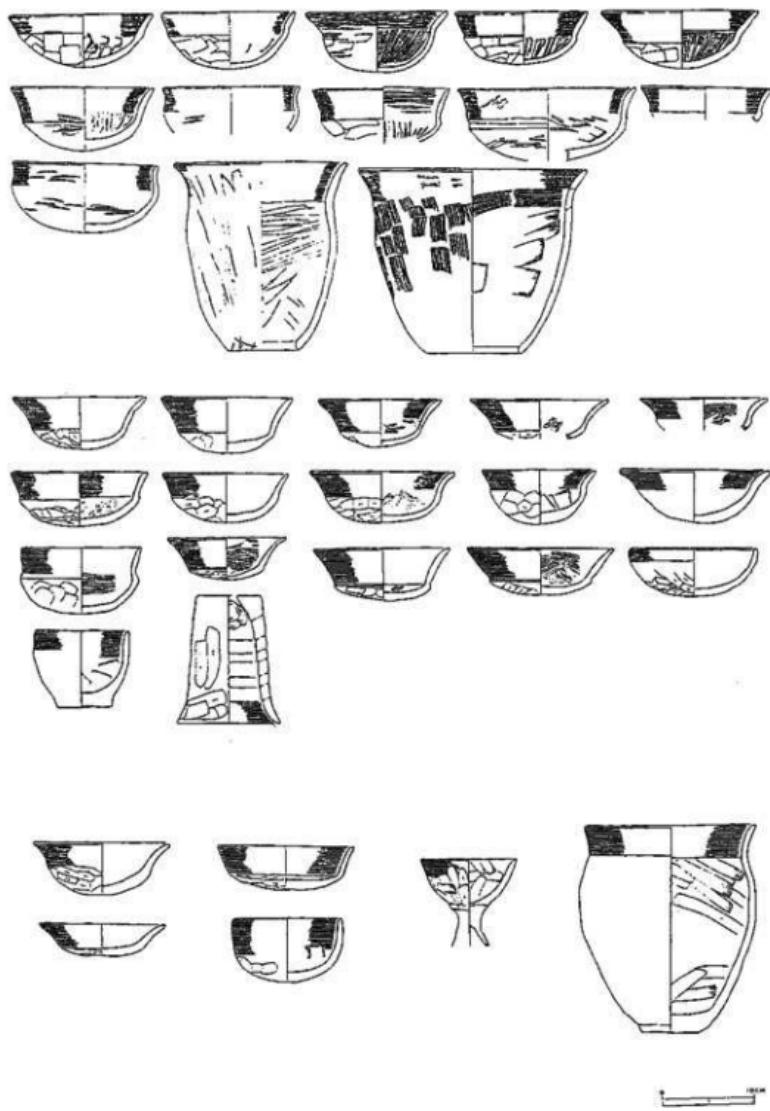
瓶は大型のみ確認されている。砲弾形胴部で、口縁部と胴部の境目は不明瞭だが、ヨコナデで区別される。口縁部はゆるく外反する。粗いハケ目で調整されているものもある。

壺Cの形態から考えると、6世紀後半あたりの年代で把握することができる。

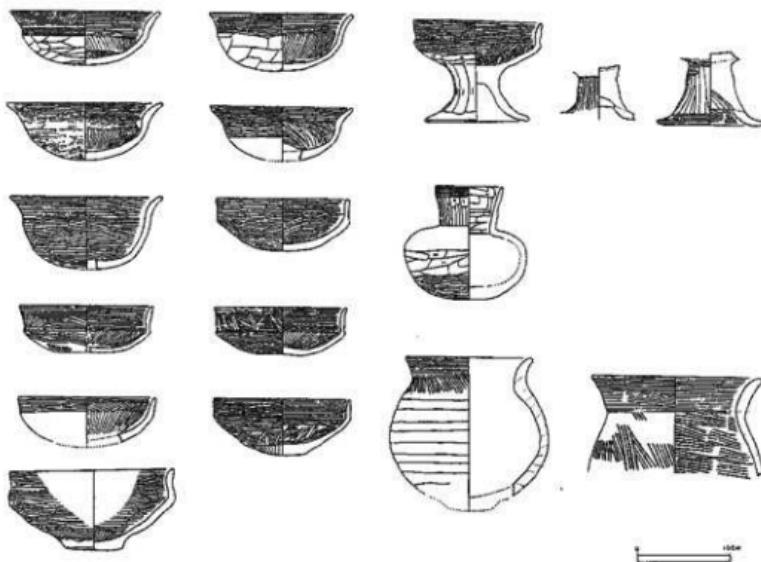
壺D・壺Eなどの形態の変遷からは相双地域の土器がいわき市城の上器群よりは郡山市城の土器群に近い印象で見ることができる。ただし、長胴甕の長胴化が早い点、典型的な壺Cが確認されない点、壺D・壺Eの口縁部がやや長めである点など細部では地城色の相違と考えた方がよい特徴もある。

次に会津地域であるが、現在までわずかに1遺跡、会津高田町十五塙遺跡第1次調査区1号住居跡から「舞台式」併行期とされた土器群が出土しているにすぎない(第18図)。ここには壺・高壺・壺・大型甕・小型甕があるのみである。

壺・壺類は壺E・壺Dが主体で壺C・壺Fなどもある。いずれもよくミガかれる土器である。壺D・壺Eとも口縁部の外反度が大きいもので、内面黒色処理されている。壺Cは口縁部直立形態であるが、体部・底部が扁平化しているもの、棱がゆるくなつたり不明瞭になつたりしたものがある。壺Fも棱の消失した壺Cと考えた方がよいものである。高壺は高壺Bであり、壺部はこの住居跡の



第17図 相双地域の古墳時代後期土器(3)【住社式(新)段階】  
(上:鹿島町大六天造跡17号土坑、中:相馬市大森A造跡1号住、下:同2号住)



第18図 全津地域の古墳時代後期土師器（舞台式段階）  
(十五塚遺跡第1調査区1号作)

壺Cの形態である。中実気味で擴のあまり広がらない、短脚の脚部である。壠は胴部に対して頸部のやや矮小化したものの頸部の開きも小さい。

壺は大型・小型とも頸部の屈曲のゆるいもので、ハケ目調整の胴部である。

田中敏氏の指摘のとおり、「舞台式」・「住社式」併行期と見ることができ、6世紀後半の年代を与えることができる（註35）。

ここまで、福島県域を5ヶ所に分けて土器の実態について述べてきたが、この5地域はそのまま5つの地域色にあたるものと考えることもできる。しかし、前述したように郡山市域は東西2つの小地域に分けられるかもしれません。5つ以上になる可能性もあることになる。大きくまとめると、全体的に関東色が強いと思われるいわき市域と、それ以外のすべての地域の2つになるが、これは相双地域—郡山市域—母畑地区という南北ルートと常磐—仙台湾ルートという直接的交通路が成立しているいわき市域の2つの流れという見方につながることになる。

#### 4. 古墳時代後期土師器群の地域性 —「佐平林式」・「舞台式」と関東の土器群—

前章において福島県域の各小地域の上器群を観察してみた。そこには大きく見て2つ、細かく見ると5つ以上の地域色ある上器群の存在を確認することができた。本章においては前章の観察を踏まえて北関東の上器群との交渉のあり方を若干指摘しておきたい。

群馬県域の上器群についてはすでに田中広明氏の広範な考察があるほか、松本保氏の北毛地域の

上器群の考察と福島県白河市明戸遺跡の資料の比較もある（註36）。松本氏は月夜野町・沼田市・渋川市などで発掘調査された古墳時代後期の遺跡の中から派生遺跡・石巻遺跡・糸井宮前遺跡・中村遺跡・村主遺跡・門前A遺跡・後田遺跡の7遺跡を取り上げ、内面黒色処理される壺・高環を中心に入器種の分類・編年を試み、群馬県の平野部の上器群との相違点を整理し、南東北・新潟・長野の「黒色土師器」との類縁性を指摘しながらも、器形面の相違から同一視せず、北毛地域独自の土器群として「派生型土器」という概念を提唱された。

確かに、個々の土器を比較すると相違点が目立つが、前章で壺Eとして扱ってきた福島県城特有の「在地型壺」のうち、6世紀後半段階に認められるものの類型の一部と松本論文65ページに図示された壺C類・E類・J類などは近似するものが指摘できる。明戸遺跡との比較も大筋では正しいと思われる。ただし、明戸遺跡の資料よりはやや古い段階にあたる郡山市丸山遺跡・大根畠遺跡・天栄村舞台遺跡の該当する時期の資料の方がより近いという印象がある。ほぼ同時代的に影響を与えていていると考えておきたい。ただし、壺類以外の器種には目立った類似性は見ることができず、土器の交流関係は極めて限定的で、人的交流はさらに細々としたものであると考えざるをえない。

1本の細い糸が福島県南部から北毛地域に繋がっていたという程度の交渉なのであろう。

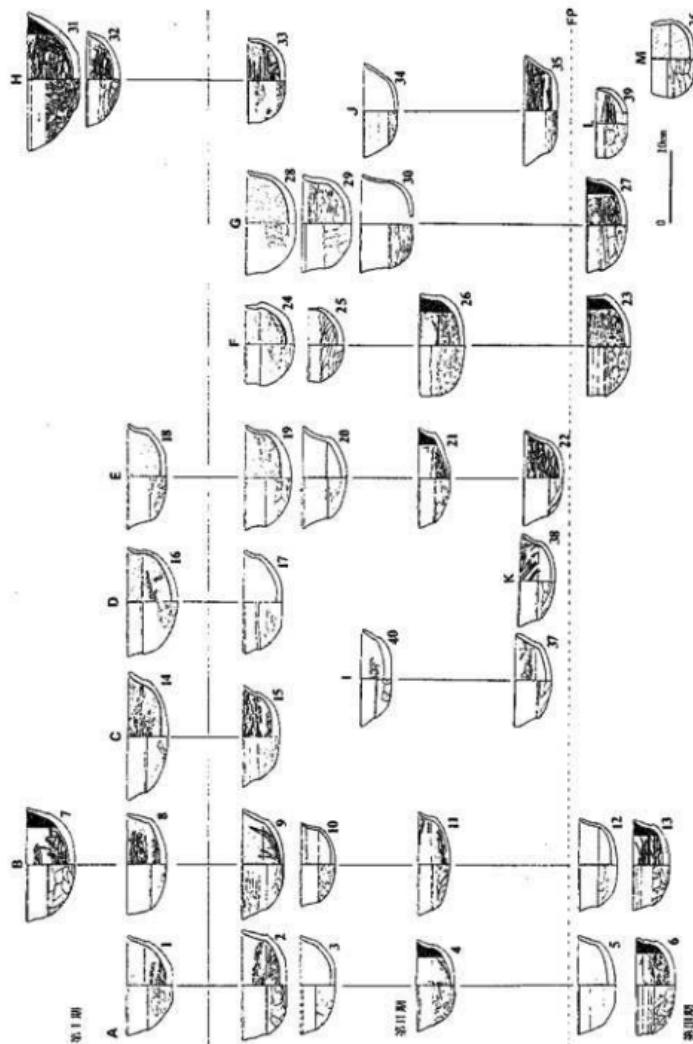
栃木県域ではどうであろうか。県の北部においては古墳時代後期の遺跡の発掘例が少ないので、福島県城の上器の影響を考えることのできる資料はたいへん少ないと思われる。わずかに宇都宮市聖山公園（根占屋台）遺跡14号住居跡（註37）に壺E類似の土器が2点、宇都宮市聖山遺跡1-16号住居跡（註38）で壺D類似の土器が1点だけ確認できた。聖山公園遺跡の2点のうち1点は内外面赤彩が施され、口縁部の外側と内面全体が入念にミガかれていた。器形は棱がやや曖昧で口縁部の外反が大きいものである。一見した感じでは郡山市域から相模地域にかけての土器に印象が近い。共伴資料は6世紀中葉から後半にかけての土器群と考えてよいものである。ここでも限定的交流しか思い浮かばない。

茨城県域でも壺E類似土器は散見されるようであるが、やはり極めて少数である。あまり探索していないが、筑波町小田橋遺跡・水戸市大塚新地遺跡などに見られるようである（註39）。細かい特徴まで類縁性があるかどうか検討が必要である。

福島県城を主体に考えると、前述したように5世紀後半から須恵器模倣壺・砲弾形大型壺・カマド導入など関東地域からの強い文化複合の侵入が始まり、在地的な土器群を変化させていく。しかし、6世紀前半の定着期を過ぎる頃から、北の土器の影響が強くなり、6世紀後半の新しい段階ないし7世紀初頭には土器群の関東の地域色は一掃されてしまう。エミシの主体性の強まる時期の問題として考えざるをえないものである。

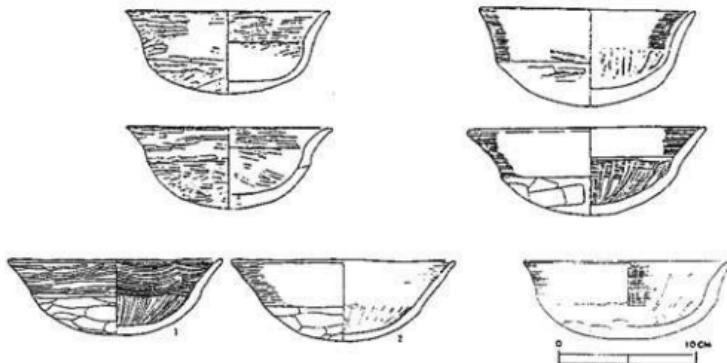
## 5. おわりに

古墳時代後期の福島県城においては関東とやや異なる独自の須恵器模倣壺（本稿の壺C）・「内斜口縁」壺の系譜の土器群（本稿の壺E）が存在し、一定の地域性をもって小地域土器群に分かれることが想定できることが本稿においても再確認することができた。そして、それらのうちごく一部の類型に属する壺に近似するものが栃木・群馬の北寄りの地域および茨城に少数出土していること



第3図 環分類・編年表

第19図 松本保氏の北毛地域古墳時代後期環分類図 (註36文献から転載)



第20図 環Eと環E類似上器の比較

(左上：都山市丸山遺跡8号住。上右：鹿島町大六木遺跡17号坑。下左：宇都宮市舞山公園遺跡14号住。下右：宇都宮市猿山遺跡1-16号住)

も明らかになった。この事実については「佐平林式」・「舞台式」の概念を尊重して考えねばならないとは思うが、相馬一都山一宇都宮あるいは都山一舞台一明戸一北毛という上器の類縁性からはこれらの型式概念の有効性を含めた上器群の特徴に関する再検討が必要である。もちろん、調査例が少ない地域も多く存在するため、現時点で想定される地域色の認識が全面的に正しいかどうかは検討の余地がある。この点については、将来関東地方の古墳時代後期土器群の地域性について巨視的に考える機会を持った時に再考したいと思う。

本筆になったが、本稿完成までの間に多数の方々にご教示・ご協力いただいた。高橋信一・柳沼賢治・佐藤典邦の各氏には母畠地区・都山市域・いわき市域の土師器の見学に便宜をはかっていただき、上器の認識についても種々のご教示をいただいた。河野寛映・福田健司・筒森健一・坂野和信・酒井清治・渡辺一・飯塚博和・中村倉司・鈴木徳雄・桜岡正信・水口由紀子・田中広明・大谷徹・大屋道則の各氏には土師器の検討にあたってご指導・ご教示いただいた。宮瀬文江・村田章人両氏には執筆の合間に執筆方針について筆者の意見を聞いていただき、時には挫折しそうになる筆者を激励していただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

なお、本稿は埼玉県埋蔵文化財調査事業団から筆者に与えられた昭和63年度研究助成の対象研究「埼玉県北部における古墳時代後期土器群の編年と地域性」の成果の一部である。

#### <註>

註1 利根川章彦 1982 「古墳時代聚落構成の一考察 — 児玉地方の5~8世紀における聚落群の動態と土師器の変遷を中心として—」『土曜考古』第5号

ただし、この編年案の初期とその前後の層年代について下記文献で補正した。

- 利根川章彦 1984 「県道鉢川・善清寺蔵開発文化財発掘調査報告」向田・猪垣塚・村後: 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集 207~208ページ
- 註2 小野正好 1969 「畿内古代集落復原への基礎的操作」『古代文化』第21巻3・4号  
住居の遺跡内移動・移築に関する法則性について他に体系だった考え方が示された論考は皆無に等しい。
- 註3 大庭直道 1990 「中田以前の土師器研究—編年研究の原則と分類視点の変遷」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』第7号 100~120ページに詳細に解説されている。
- 註4 杉原莊介 1943 「原史学序論」 葦芽古房
- 註5 代表的なものとして下記文献がある。  
平口時雄 1972 「土師器」『新版考古学講座 5 原史文化(下)』 雄山閣
- 註6 岡田淳子・服部敬史 1968 「土師器の編年に関する試論」『八王子中田遺跡—古墳時代集落の調査—資料叢書』 八王子市中田遺跡調査会
- 註7 古田忠二 1979 「平城宮北方官衙出土土器の編年」『平城宮発掘調査報告Ⅳ』 泰良園立文化財研究所
- 註8 西弘満 1978 「難波宮西方官衙出土土器の編年と西方官衙についての考察」『飛鳥難波宮発掘調査報告Ⅱ』 泰良園立文化財研究所
- 註9 田辺昭三 1970 「陶邑古窯址群」 平安学園考古学クラブ  
田辺昭三 1981 「須恵器大成」 集話社
- 註10 中村浩也 1976~78 「陶邑Ⅰ~Ⅲ」 大阪府史跡名勝天然記念物調査概要第29~31朝
- 註11 岩崎卓也 1964 「東日本における土師器の研究—(1)として鬼高式土器に焦点を置いて—」『史学研究』72号 東京教育大学文学部
- 註12 註5に同じ
- 註13 杉原莊介・大塚初重編 1970 「土師式土器集成 3」 東京堂出版
- 註14 服部敬史 1972 「ムラの道と仲買人 東京都船橋遺跡の集落」『月報 新版考古学講座 第5回配本 第5巻 原史文化(下)』 雄山閣
- 註15 杉山吉作他 1987 「房総における古墳時代後期土器の年代と地域性」 第6回総括シンポジウム資料集
- 註16 東国土器研究会 1989 「黒色土器一出現と背景」『東国土器研究』第2号
- 註17 万葉の黒シンボジウム実行委員会・鹿島町教育委員会 1989 「シンボジウム「福島県に於ける古代土器の諸問題—特に5~7世紀を中心として—」(資料集)」
- 註18 長谷川洋 1988 「古墳時代後期土器の研究(2) 地域性の諸問題についてー」『神奈川考古』第24号  
長谷川厚 1991 「古墳時代後期土器の研究(3) 一房総地域の差異についてー」『神奈川考古』第27号
- 註19 中村倉司 1989 「関東地方における窓・大型窓・須恵器出現期の地域差」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要』第6号
- 註20 村山好文 1985 「印旛沼・手賀沼周辺における古墳時代後期の特異な菱形土器について」『日本考古学研究 所集報』第6号
- 註21 田口一郎 1988 「海行A・B遺跡」 鹿島郡茨郷町教育委員会
- 註22 水口由紀子 1989 「いわゆる“比企型環”的再検討」『東京考古』第7号
- 註23 田中広明 1989 「上毛野・北武藏の古墳時代後期の上器生産—上器生産の転換と在地首長制—」『東国土器研究』第2号  
田中広明 1989 「縁泥片岩を運んだ道—変容する在地首長制と労働者発情—」『上關考古』第14号
- 註24 この用語は坂口氏が好んで使用している。本来「く」の字状態环などの用語の方が妥当であると思うが、本稿によって命名の混乱を産むのも得策ではないので、とりあえず従っておきたい。和泉式土器を論ずる時にその内面を考えたい。
- 註25 須恵器模倣环は種々のバリエーションがあり、時期的变化も多く、模倣対象となる須恵器も各地域の製品がある。現在までにこうした模倣現象のすべてに法則的理説をした論考は皆無である。本稿では、須恵器の器形に関する

個性のある個体には広くこの概念を適用する。

- 註26 目黒吉明他 1978 「母畑地区遺跡発掘調査報告II」 福島県教育委員会・福島県文化センター
- 註27 高木和夫・大越忠士他 1979 「母畑地区遺跡発掘調査報告III」 福島県教育委員会・福島県文化センター
- 註28 高木和夫・大越忠士他 1980 「母畑地区遺跡発掘調査報告V」 福島県教育委員会・福島県文化センター
- 註29 小井川和夫他 1982 「御駒堂遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書VI」 宮城県教育委員会
- 註30 目黒吉明他 1978 「母畑地区遺跡発掘調査報告II」 福島県教育委員会・福島県文化センター
- II高勞・山内幹夫他 1979 「母畑地区遺跡発掘調査報告III」 福島県教育委員会・福島県文化センター
- 日高勞・大越道正他 1980 「母畑地区遺跡発掘調査報告V」 福島県教育委員会・福島県文化センター
- 註31 木川一郎 1981 「舞台一福島県天栄村における古墳時代集落跡の調査」 福島県岩瀬郡大字村教育委員会
- 註32 渡辺一雄他 1981 「朝日長者遺跡・夕日長者遺跡—古代集落跡の調査—」 福島県・いわき市教育委員会
- 註33 橋沼賛治 1989 「福島県中通り地方の土師器」(註17文献所収)
- 註34 橋本博幸 1989 「福島県相双地方の土師器」(註17文献所収)
- 田中敏 1989 「福島県会津地方の土師器」(註17文献所収)
- 註35 註34田中報文に同じ
- 註36 松本保 1988 「古墳時代後期における群馬県北部の土器様相—黒色土師器の検討から—」『東国史論』第3号
- なお、福島県明治遺跡については下記文献がある。
- 辻秀人他 1984 「明戸遺跡発掘調査概報」 福島県立博物館調査報告第8集
- 註37 染木誠也 1984 「聖山公園遺跡II—昭和58年度発掘調査概要—」 宇都宮市教育委員会
- 註38 川原由典・中山香他 1981 「猿山遺跡 付 久部古墳群」 柳木町教育委員会
- 註39 黒沢彰哉 1986 「茨城県中・南部における6・7世紀土器の様相—筑波町小田橋遺跡出土土器を中心として—」『妻良岐考古』第8号

## 研究紀要 第8号

1991

平成3年10月28日 印刷

平成3年11月1日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字笑輸字船木884

☎0493-39-3955

印刷 誠美堂印刷株式会社